

く頼んで便乗し、巡回の目をのがれて、食糧を手に入れることができた。その時の怒りと、イトマンチューといってさげすんだあの目つきはいつまでも私の頭から消えることはないでしよう。

当時は警官もひどいものでした。母も魚の計り方が少しくるつているということで三日間も留置されたことがあった。

一九四五年（昭和二十年）に入るといよいよ食糧事情はひどくなりばかりで、住民はもとより、兵隊も腹をすかして農家の農作物を荒すものや民家に入つていもごいをするものが多くなった。

私たち漁民は魚はそれでも、食糧との交換もできずサツマイモをおかゆにして食べたこともありました。そこで背に腹は代えられぬとかくごをきめ、夜になると九時頃出かけ、農家の畠へしのびこみ「むいあつこん」（イモの収穫後に掘り残されたくずいも）採りにいくことにした。

これまで人様のものを無断でとつたこともなく、最初の晩は手足ががたがたふるえて、ガサという小さな物音にもびっくり仰天したこともありました。しかしまラリアで倒れた家族のこと、子どものことを考えると悪いことをしているという罪の意識も次第にうすれ、良心のかしやくもなく盗人になりさがつてしまつた。当時は私ばかりでなく近所のもの、いや農家以外の殆んどの人たちがそうでした。いつの頃からか私たちはこのイモどろぼうにいくことを「戦果あげ」と呼ぶようになり、「今夜は戦果があがつた」とか「戦果はどうだった」などと近所の主婦たちと話しあっていたものです。この「戦果あげ」は誰が始めたか、知るすべもないが、兵隊たちもやつていたということを聞いて、少しさはすぐわれた気持ちになつた。

たものです。

しかし、そんな中でもモミ（農家が収穫して田小屋においてあった）には手を出すものは私の知る限りではなかつたよう記憶している。やつとの思いで、家族の食事をまことにあわせ身心ともに疲れ果て、終戦を迎えたときは全く鍛く氣力もなく虚脱の状態で兵隊（特設工兵隊）に出ていた弟も無事にかえつてきた。誰がどういうつもりで始めたか知らない戦争に強引にまきこまれ、生地ごくさながらの苦労と食糧難で生活苦をよぎなくされた戦争を再び起こしてはならないと思います。

七、良心の自由を細々と守る人びと

石垣町登野城崎山里秀（二八歳）

私は昭和十八年八重山農学校にたまたま勤めることになった。そちらには奉安殿というのがあって、何とか勅語や天皇写真が「安じ奉られる」ことになつていて。正式に学校に勅語謄本や写真が文部省から「下賜」されるとその学校は歴史の格が高い学校と、文部省が評価したことになる。同時に学校長は責任を負わされる。学校沿革史にも下賜のことは記録される。このことについて、私の勤めた学校で、最近私はだしかめてみた。その学校には昭和十四年九月に「青少年学徒に賜わりたる勅語」謄本と、「総理大臣を召され賜わりたる軍人授護に関する勅語」の謄本を下賜する、と学校沿革史に記録されている。そして、昭和二十一年九月三日には両勅語を

内務省通牒に基き奉焼す。」とある。だから教育勅語も御真影（天皇や皇后などの写真）も文部省からは直接来ていかつたことになる。ところで、この期間に、この学校の生徒たた某主婦に、あの奉安殿は何があったかと尋ねると、天皇陛下の写真と答えた。當時の生徒は、御真影奉安殿と考えてその前を通るときは必ず一時停止、気をつけ・最敬礼をさせられておつた。この奉安殿には、教育勅語謄本や御真影の下賜がなかつたことは明かに学校沿革史からわかるが、それ相当のものがあつたかも知れない。要は、奉安殿といふ一坪たらずの、神宮の恰好をした建物の中に、國家権力としての天皇の権威が祓されておればよかつた。

さて、われわれは小さい道路から大きい道路に出るときは交通信号がなくとも、一時停止することになつていて。これを実行しないとひどい目にあわされるものだ。しかも一時停止に時間がかかると、いらだつ人もおつて、いよいよ危いことになる。できるだけ一時停止の避けられる道路を選ぶのが、ドライバーである。私は「天皇の権威」とそれほどつき合つ必要がなかつた身分・職階であることをいいことに、いわゆる「先取り」ではないが、殆んど廻りみちをしていた。隣の小学校にはほんものの「御真影」と「教育勅語」があつたはずだが、その奉安殿は学校正門前にあつたので、そこは通らないことにしていた。これは私ひとりかと思ったが、そうではなかつた。私と同年輩の田本信精教師もそうするものだから「君もなそこは避けているな」というと、彼はにやつとして、大笑いして、「そういう生徒も多いぞ」というて口に手をやつた。

しかし勿論いつも廻り道をするわけにはいかない場合がある。奉

八、日本は欲ばかりだからね

石垣町字大川大浜アワツ（六十六歳）

安殿の前で最敬礼をする。この時、背をまげた時の目の高さでいつも目にしみ入るのが針状の葉を持つたビャクシンであった。どこの学校の奉安殿の前にもビャクシンがあつた。ビャクシンの濃い緑の針状の葉は、天皇守護神の天照大神の権力を表徴として、否応なしに私の服従を強制する顔つきみたいで、私の心の秩序を乱した。このビャクシンに対しては私は精神的アレルギーを感じてしまつたらしい。奉安殿の中身が取り去られた戦後五・六年、友人が新築の家の玄関わきにビャクシンを植えたい、というので、私は反対したことがまだ印象に残つている。

（問）戦争の時「天皇陛下万歳」といつて死んでいったという話があるでしょう。ばあさんは敗戦時はもう六十になられたがどう考えられましたか。

（大）まったく逆立ちですよ。國を治め、國のためにやつてから、身のため、親のためはやるというわけでしょう。これは逆でですよ。誰が子を産み、育てたの？なにがなんでも親と子を立てられない、國は立てられないのではない？これが当たります。子供がじゅうぶん育つように國は立てるべきででしょう。逆になつていて。戦争というのは、親を殺し子を苦しめる。子を殺し親を泣かせる。これが戦争。

(問) 竹やり訓練や防空演習があったでしょう。

(大) 先生方がね、生徒を集めてね、竹やり訓練をなさるでしょう。

う。もの笑いよーほんとにあんたがたは、戦争がきたとき

に、竹やりで戦争ができるかね。かわいそうに。何のお説教

かをがやがやしているんだけどねーとは心で思つてもね。

お上の仰せでしよう。

防空演習も同じことですね。

(問) 戰争は勝つと思われた?

(大) ウッシャラ。 (相手のことばや考えと、自分の考えが全面的に対立するとき発する感嘆詞)

わたしはね、いつもT先生と口げんかをしておったんだよ。

わたしはね、こういうたのよ、

「日本のひとは、欲ばかりするから、あの島を取つてね、はら日清日露の戦争、それからその次の戦争は、何といったかね、そろそろ、支那事変、そのあたりまでは兵隊をどんどん集めて、どうやら間に合つたでしょう。ところが、日本は欲ばかりだからね。こんどの戦争では、あの島、この島、遠い所までかこんで取つて、さあ、こんどは兵隊は足りない。島々で見届きはできない。兵隊をどんどんセン五リンで集めて、この島にやる、あの島にやる。それでも足りない。それでも足りなくて、欲ばかりだからね。今にたいへんなことになるよ」と私がいふとね、T先生は、「おばさん、こんな話、参謀長に聞かれると、大変な目にありますよ」。すると私は、「なぜ大変なことになる? ひとつ

九、牛馬や畠が盗まれないよう

石垣町登野城 宮城 昇 (三十三歳)

戰時中は、日本軍は供出供出と言つて略奪行為にも等しい、目にするもののとりようであった。特に農作物、立木、家財、牛馬等の供出で住民の生活は破壊された。

部落近くにある田畠の農作物は掘りあさられ荒廃そのものであつた。

屋敷にあつた防風林、ふく木、やらば、いぬまき等も切りたおされ、防空壕、兵舎等に使われた。牛馬は陣地構築のため徴発され、五一の時は軍隊の食に供されることもあった。徴発をまぬがれた牛馬も兵隊によつて夜中につそりと盜みだされることもあつた。そういうことで、わたしは、牛馬が盗まれないよう、自分の馬の手綱に適当な纏詰の空籠を、四、五個しばりつけておき、枕元につないで寝ることにしていた。一度は、屋敷の外まで兵隊によつて引っぱりだされたが、この空籠のぶつかりあう音で目がさめ騒ぎだしたので馬を盗まれずして済んだ。

徴発がひどくなつたのは昭和二十年の五月以降ぐらいからで各家々の畠がとられていった。墓とか如小屋に避難しはじめていた人々も多かつたのでその空家にあつたものまで盗つていつた。そこでわ

たしは、自分の家の畠の妻を剥ざとり、天井裏に隠しておいた。後日の生活の事を考えたからである。避難から帰ってきた時たいへんたすかった。個人の財産も軍はみな天皇のものと思っていたのか、とにかく軍にはなかされました。

十、母と五人弟妹を失つて

大浜村字大浜 新盛正尚 (十三歳)

三月二十三日、大浜村役場前庭で形ばかりの修了式を済せた私たちは、四月から高等科一年に進級することになつて、すでに緊迫した社会状況を感じていたが、それにしてもこんな恐い運命が待ち構えていたことを誰が想像しただろう。三月の末にはもう激しい空襲が始まった。前年の空襲とは異つて、夜明けから日暮まで數十機が交互に飛来し、猛爆撃を展開した。空爆は衰えるどころか、むしろ日暮しに激しくなつていくばかりである。大浜部落は海軍飛行場を守るためにその周囲には陣地があつたので、大変危険であつた。実際あつちこっちに爆弾が落ちた。連日の激しい空襲のため生産も殆んど行なわれなくなつた。そうした中で、どの家でも、夜になると母親は明日の食物の準備に大変であった。特に夫は召集され幼少な子どもを多数かかえている家の母親の労苦は大変なものであつた。こうして母がやつとのことで炊いてくれたンムニー(芋だんご)を食べ、空襲から防空壕で終日身を守る、それが私たちの一日の生活であった。

空襲が激しくなり、大浜部落民の危険が増してくると、多くの部落民は安全な地帯を求めて山岳地帯に避難を始めた。安全といつても空襲を避けるためにはより安全というだけ出かけていった山岳地帯はすべてマラリアの有病地帯として恐れられていた所である。マラリアがいつごろから八重山に現われたかわからないが、石垣島の中央を南北に連なる山なみはほとんどマラリア地帯であり、そのために廻村になつた村もあつた。早くもどこの〇〇さんが死亡したという不幸な知らせを次々と聞くようになつた。父を兵隊にとられ、たくさんの幼な子をかかえている私の家では、それがこわくて、どうしても有病地への避難を決意することができなかつた。さりとて自分の家でそのまま留まることはもはやできなかつた。

そこで、部落の後方少しはずれた所に隣組単位で掘つた防空壕があつたので、そこに避難することにした。今日の大浜公園の中の大きな岩の下である。そこは木も、うつ若としておい繁り、湿気もそんななく壕も大きく安全だったので恰好の避難場所であつた。そこには、私たちと同じように山岳地帯への避難をしかねた相当の人々が集つていた。それだけに心強くもあり、しばらくそこで生活を続けることにした。

五月のある日のこと、突然空襲が始まつた。あつちからもこつちからも、子どもを抱きかかえあるいはひきずつて大慌てで壕に駆けこんできた。壕に入つて家族あるいは隣人の無事を確め合つて胸をなでおろした途端、妊娠していた隣のおばさんのいないので気がついた。

「どうしたのだ」

かりおどして、兵隊ばかり取つていつて。誰が戦争やれといふたの」というて、けんかをしておつたのよ。

「産氣をもようしているので、壕ではお産はできないし、また壕までいく力もないで、家でお産をしてからいく」とつていた。

皆おろおろしだした。一人の世話人もついていないのである。空襲中おばさんの安否を気づかつて、いても立つてもおれなかつた。

ところが空襲が止むや気づかれていたそのおばさんが、産み落としたばかりの赤ちゃんを抱きかかえ、乱したままの姿で壕にとんできたのである。一同ほつとしてわが事のように喜んだ。だがその時の姿はあわいでみじめであった。そのおばさんは、これまでの無理と壕の中での冷えこみがたたつのだろう。間もなく産褥熱をだし、今生んだばかりの赤ちゃんと数人の子どもを残してとうとうこの世を去つてしまつた。残つた赤ちゃんは親戚のおばさんが引きとり、空襲の合い間をみて、その子のためにあつちこつちの壕をまわつては乳を乞い求めた。

戦争の中とはいゝ、生まれて間もなく母親に死別した子をなんとかして命をつなぎとめ人として育てあげたいという苦労の甲斐もなく、その赤ちゃんもまた数日後には母の後を追うて逝つてしまつた。あの死んだおばさんはちゃんと夫がいるのである。ところがその時自保の防衛隊に召集され、自分の妻のお産にも、死にも、また赤ちゃんの死にも会えなかつたのである。私は戦争の犠牲をまたあたりにみた。それまでは戦争を勇壮に想い、軍人となつて戦場で働くことが天皇のためであり、日本人としての道だと考へていたが、それ以降、戦争というのはこんなにも残酷なものかとこわくなるとともにつくづくいやになつた。

その後も私たちは、マラリアで倒れることを恐れて山岳地帯への

避難を躊躇し部落の一角で耐え忍んでいた。そのうちに、戦争が遠のき第二避難場へ行かなくともすむ時が来ることだらうとかすかに期待して、一日一日を千秋の思いで過してきつた。しかし私たちのかすかな期待は無惨にも打ち破られた。

甲戦備に入った。「六月十日までに第二避難場に避難せよ。」と軍は命じてきたのである。

こうした万ーの情況に備えて、於茂登山の山奥に部落総出で造つた避難小屋があつた。

ところがその小屋の屋根や壁の茅は兵隊にはぎとられて住むことができない状態にあるといつことが既に私たちの耳に入つてゐた。どこへ行つたらいいものか。十日まではともかく部落を出なければならなかつた。幼い子どもたちをかかえて母は毎日苦しんだ。行くべき場所も定まらないままに避難の支度だけは愈るわけにはゆかなかつた。

やつと親戚のおじいさんの好意で、私たちの避難場所が決つたのは底原であつた。しかし底原に特別に頼りになる人がいる訳でもなく、その近くに田や畑がある訳でもない。ただ、そのおじいさんの少し知つてゐる台湾の方がそこにいて、その人の馬小屋があつてゐるからというだけであつた。その馬小屋は、先に避難した人がそこで死んだという縁起の悪い所で、余り気は向かなかつたが、それ以外に行く場所をもたない私たちは、素直にそこへ行く以外に途はないかった。

最終日の十日、バンナーに召集されていた父が、家族を心配して暇をもらつて來てくれた。あの時の嬉しさは今でも忘れることはで

きない。追いつめられた状況であつたから父がほんとうに頬もしく心強く感じられた。

何しろ母を手伝うことのできる者は私一人だったので。夕食もそこそこに、馬車に荷物を積めるだけ積み、馬車にさがつたり、引っぱられたりして、真暗な道を底原へと急いだ。家を出たのが夜の九時頃だつた。途中カニニーで空襲に逢い、馬車をほつたらかして逃げかくれすることもあつた。目的地の底原に着いたときはすつかり夜は明けていた。

底原では、農作物をつくることもなかつたし、またつくるうにもつくる所もなかつたので、食糧は母が避難に備えて營々として貯えた米で間に合わなければならなかつた。

しかし食糧の不安もさりながら、私たちが最も恐れていた事態が現実となつた。二ヶ月に及ぶ壕生活、睡眠不足、無理、栄養失調等がたたつたのだろう。祖母を除いて七人の家族が一へんにマラリアに倒れてしまつたのである。薬といえば部落にいた時、兵隊からもらい受けた僅ばかりのキニーネがあるので、それも忽ち飲みつくし、後はほんとうに原始的な治療を続けるほかはなかつた。祖母は必死になつて七人の看病を続けた。

熱がさめれば、私が祖母を手伝つた。芭蕉を切つてきて、それをたたいて枕にし額に水をかけ、熱のひどいときには、ミントウ(乙みかみ)や腰あたりをカミソリでかすかに切つて血を出したりした。あるいはヨモギの汁をしづつて、それを飲ましたり、蚊の来襲を防止するためにヨモギの枯葉を燃らしたりした。

こうした必死の看病にも拘らず、母や弟妹たちはいつこうに快方

に向わず、体力は日に日に衰えていった。特に母は疲れ切つてその衰弱ぶりはひどいように思われた。このままでは忽ちのうちに一家全員が死んでしまう。

ここにおいてはどうしようもない。万策尽き、同じ死ぬなら、自分のが生れた屋根の下がいいということ、また来た時と同じ道を部落へ引返した。その時にも迎よく父が家族を心配して隊を逃げてきてくれていた。家を出て丁度十日目であった。この状態だと自分の家に帰つても自らの力で生きていいくことは困難であった。やむなく親戚のおじいさんの力にすがることにし、そのおじいさんの家の宿をとつた。ところがそこにたどり着くとそれまで離よりも元気であった祖母が「あゝ疲れた。」とたつたひと言を残して横になつたまま不帰の人となつてしまつた。思うに、祖母は老いの身で死ぬ程に疲れはてていたのだが、ここで自分まで倒れてはと、疲労の色一つ顔に見せず、私たちの看病に当つてきたにちがいない。その事を考えると祖母を殺したのは自分たちなのだと想ひが胸をついて、今でもその事で苦しめられる。

他家でやつかいになりながら死人を出したという家は、相手にとって縁起が悪く迷惑なので、私たちは、そこを出て自分の家に行くこととした。その時母は衰弱の余り口を利くこともできず、既に死を覚悟しているようであつた。弟妹も差はあるが、殆んど母とかわらなかつた。それから幾日たつたのだろう。七月十六日、母は子ども六人を残して、誰も知らないうちに一人静かに去つてしまつた。母が去る丁度その時刻だったのだろうか私はマラリアの高熱で苦しみ、前後不覚に陥つてゐた。父が帰つてきたのも分らない。私が

意識をとり戻した時には、父が母を抱きしめ、母の額に手をして泣いていたのである。とうとう母は死んだのだ。私は唯ぼう然として、その時は涙さえなかつた。父は家族の事が余りにも気がかりで今度も隊を逃げだしして家族の情況をみに来た所だったものである。

虫の知らせとはこういう事をいうのだろうか。軍紀に縛られている父は、母の葬式が済むとすぐ帰隊してしまつた。私は五人の重病の弟妹をかかえて途方に暮れた。これから先どうしてやつていつたらいのか分らなかつた。とにかく体力をつけることだ、という訳で自分も発熱しながらおかゆを炊いてやるのだが一人も食べてくれない。箸をつけることさえもしない。そのような状態が続くにつれ、私も次第にあせり出し心もおだやかでなくなつていつた。

マラリアの特效薬というので米二升と一個の割合で何個かのアテプリンを貰い、それを飲ましてもいこうに生きはなかつた。そのうち末の妹が去つた。母の死後一週間ぐらいのことである。まだ二つで、その子のために乳を求めて方々まわつた私の努力も空しいものになつてしまつた。

それからまた約五、六日後の七月三十日、弟と妹が同時に去つた。その時も、私は母の場合と同様高熱で全くわからなかつた。その二人の死を発見したのは叔母であった。母の妹に当る人で、私の母が死んだのもまだ聞いていなかつた。叔母はアイクルの避難場で「自分はもう行くから残つた子どもたちを頼むよ」という母の夢をみたということで、私の家族のことが心配になり、情況を伺いに避難場からわざわざ来てくれていたのである。

カマスにくるまれ、足を露出させたまま海岸端に葬られたといふ。この世の出来事とは到底思えない悪夢のようなことが、現実に行なわれていたのである。

第七章 食糧難とマラリア

一、抜刀威嚇で死地マラリアの島へ疎開

一家畜と人間の生地獄、波照間島の悲劇――

1 台湾沖航空戦を身近に

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、ハワイの真珠湾急襲によって勃発した太平洋戦争の波は、日本最南端の地、波照間島にもたちまちのうちにせまつてきた。

即ち同月十八日に弾薬を満載して太刀洗を出発し、台湾へ向かう重爆撃機一機（隊長井上中尉以下八名乗り）がマートル原に不時着した。部落の警防団員や部落民が現場に急行し、救助にあたつた。搭乗員はがはしたものの全員無事で、部落事務所に収容し、婦人会、女子青年団、在郷軍人等がその世話を並びに飛行機搭載物品の保管警備にあたつた。

これは、この波照間島に歴史はじまつて以来はじめて飛行機が着陸したことであり、島の人々は弾薬の散在する危険ななかにも物めぐらしさにあたつた。

弟は随分と苦しかつたのだろう。あつちに転がり、こつちに転がりしていたにちがいない。排泄物がそのままぶれて散らかつていて。私の寝ていたすぐ側にいたのだが、私は全然わからなかつた。

二人の死をおじいさんに告げるとおじいさんは「今日もまたか」と観念した表情であった。棺箱をつくるための板もあるはずはなかつた。米倉の蓋をはずして間に合わせに作られた棺箱に二人は入れられた。それを担いで海岸端へ葬むりに、黙つて門を出ていくおじいさんの後姿を、私は病の床から茫然として見送つた。

祖母が死に、母が死に、幼い妹が、二人の弟や妹が続けて死んでいった。一月もたたない中に、家族の中から五人の者が欠けていつた。これでもう沢山だ。靈廟というものがあるなら、「お母さん、不幸はこれで終させてくれ、私たちを助けてくれ」と祈る気持ちであつた。しかし、四日後には次女が、更にその二日後には長女が、また相次いで兄二人を残して世を去つた。もう涙も出なかつた。「次は僕の番だ。君たちは先に行つておきなさい。近いうちに会うことができるだろう」。亡骸に手を置きながらそれが妹らに精いっぱいえることであつた。しかし不幸は我が家だけではなかつた。その頃は東の家でも、西の家でもカンカンという音が連日のようにな聞こえた。夜になつてもその音は止まなかつた。夜が更けても響いてくる棺箱を作る音を、部落の者はみな互いに黙々として聞いていた。それはまた人間に代つて隣近所の人の死を互に知らせてくれる音でもあつた。マラリアは、この大浜の土地からひとりの人をも残してはおかなかのよう荒れ狂い、毎日幾十人の命を奪い去つた。棺に入れられたのはまだ恵まれた方で、大方のものはムシロや

すらしく飛行機の見物に集まつた。翌十九日には小学校校庭において航空機に関する講話並びに飛行機の展覽と説明会が行なわれ、島の人々には太平洋戦争を実感として身近かに感じたものだつた。その遭難飛行士一行は全員無事帰還した。

翌一月八日の大詔奉戴日には校庭で「米英撃滅部落民大会」が開かれ、在郷軍人による銃剣術会が演され、「鬼畜米英撃滅」と「神國日本」を謡歌し、士気を鼓舞し、戦争への凶心を高めた。

しかし、昭和十九年になると、サイパンの日本軍全滅など苦戦のニュースが知られるなかで、同年十月五日に戦闘機一機（特攻隊一人乗、操縦士塚本庄一郎伍長）が、不時着するようになつて、これまでニュースでしか知ることができなかつた戦況が、緊迫したものとして、身近に知ることができた。その塚本伍長を石垣の憲兵隊に送り届けた波照間島米盛善幸（四十歳）は、当時のようすを次のように語つた。

「私が石垣の憲兵隊（登野城校にあつた）に連れて行つたが、彼はれつきとした特攻隊で口の丸のはちまきをして、背中には白い布で所属部隊と氏名年令が書かれていた。

二十一歳の伍長だつたと覚えているが、所属部隊と氏名は忘れだ。彼の言うには南方出撃のため、四機編隊で飛行してきましたが、天候が悪かったので相手を見失なつて行き先がわからず、島が見えたのでそこに不時着した。エンジンの故障や燃料の不足ではなかつた、と言っていた。

なぜ相手を見失なつただけで、不時着したのかは不明だが、特攻隊の行き先は死に決つてゐるので死を恐れてのことだったかも知ら

ない。ニュースでしか知ることのできない特攻隊を目の前にして、前線の緊迫した事態を身近に知った。

昭和十九年の一〇・一〇空襲は直接波照間には被害はなかったが、十月十二日～十六日にかけて行なわれた台湾沖航空戦では、島の上空を次々に編隊を組んだ飛行機が南西へ飛行し、十数分後にはものすごい爆音が聞え、黒雲がたちのぼったりした。

あるときは「五機の友軍機が飛んで行ったが爆音の後、二機帰つて行った。」（波照間二八五七上里真昭（十八歳）の証言）

また、「北から四機、北西から四機が飛行してきたが、島の南東海上に八機がつっこみ、ものすごい爆音とともに黒雲がたちのぼりまた、あるときは空雷をぶらさげた二機が低空飛行していったときもあった。」（波照間島佐事安祥の証言）

「夜になると、南西の水平線にサーキュライトの閃光がひつきりなしにたちのぼり、撃墜された飛行機が火をふいて海中に墜落するようすが、目の前にあざやかに見えた。」（垣本保（十六歳）の証言）

また十月十四日には初めて敵機が二機飛来してきたが、空襲はせずに去つた。

このように、台湾沖海戦はこの島には空襲こそなかつたものの、近海には戦場さながらの様相がくりひろげられ、通信施設のない島ではいつたい戦争の情勢はどのようになつてゐるのか知らず、不安と恐怖にさらされた。

このよきななかで、島の区長田福重勝氏は、八重山郡島守備隊に通信隊と防備隊の配備を要請した。（当時、公舎（字の事務所）の総代だった波照間島新川真那（四二歳）の証言）

戦争の緊迫した事態は金属類回収の命令でもわかつた。アルミのかんざしや、直接日常生活に必要でない全般製の容器や道具が回収され、学校では十一月二十日には体育施設の鉄棒三本も取りはずされて献納され、また翌二年一月六日には、石垣国民党附設陸軍病院へ児童調製の阿旦葉草履一五〇足を、慰問品として送つた。

空襲にそなえて、学校の校庭や各戸の庭には防空壕が掘られ、校舎、かつお工場、民家は阿旦や木枝、綱などで厳重に擬装された。昭和二十年一月二十一日午前十一時四十分、敵機八機が来襲し、初めてこの島に機銃掃射による空襲が行なわれた。

幸いにして、人命にかかわりなく、学校や公共施設には被害はなかったが、民家が二戸（野原家）と穀物倉庫四棟が全焼した。また二月八日十二時二五分、B24が一機来襲し、島を三回旋回して機銃掃射と爆弾投下を行ない、朝日丸、豊福丸のかつお工場を全焼し、昭洋丸のかつお工場の一部を破壊した。波照間島登野盛キヨ（十七歳）は當時のようすを、

「かつお工場には、ドラム缶に漁船用の石油が貯蔵されていたので、それに引火して次々爆発し、その轟音とともに空中にドラム缶がふき飛ばされ、丸い輪をつくって立ちのぼる黒煙は島のいたるところから見え、敵軍が上陸したのではないか、ときわいだものでした。」と語られた。

その翌日、二月九日からは学校での授業も停止になつた。

2 ナゾの男山下と抜刀威嚇の疎開命令

一九四五年（昭和二十年）二月初旬（朝日丸工場空襲の数日前）

波照間校に青年学校の指導員として、山下寅夫が赴任した。山下とは偽名で本名は酒井喜代輔（現在佐賀県守山市に酒井工業所を経営）で彼は波照間を去るまで本名を明らかにしなかつた。

山下は赴任当時からナゾに秘められたことが彼の周辺にあつた。彼と同一校に勤務した上里真昭は、次のように証言している。

「私は十月の末頃赴任したが、彼は私より三ヶ月遅れて赴任した。彼はどこが發令したかも不明だし、青年学校の指導員とは言つていたが、職名も不明だつた。私は彼が単なる学校の教師ではない」ということがわかつた。

それは指導員としてきていたながら、職員室の彼の周辺には十数個の火薬箱が置かれていたからである。それは背負つて行動できるようにつくられ、信管をとつて投げれば爆発できるしかけになつていた。それがまた、いつ、どのようにしてどこに処理されたか、全くわからなかつた。そのようなことがあった時点から、彼は単なる指導員ではないことがわかつた。特務機關だといふうわさも耳にした。

彼を下宿させていた西島本米（三三歳）は、

「山下さんは当初は青年学校の指導員ということで来られました。当時、波照間には旅館がないので、出張で来られる方は私の家に泊りました。一週間ばかり下宿先をさがしたが、さがせないので、そのまま私の家に下宿することになりました。

たいへん子ども好きで、うちの子をだいたり、あやしたりして、かわいがつてもらいました。ある時は、写真のかわりにといふことで、私の子どもの絵を書いてもらつたこともありました。ご飯も家

族と同じじかまのものを食べ、子どもたちにも自分が食べさせたり、ご飯つぶを床に落とすと、お父さんお母さんが苦労してつくったお米だから、一粒もそまつにしてはいけないよ、と言って取つて、自分が食べました。大変よい人でした。高木（彼の内妻の里）から、たくさんのおもちゃを持ってきて分け与え、山布（疎開地）にも持つて行きました。」

とたいへんよい人だった、と話しているがそこにナゾが秘められていた。

一九四五年（昭和二十年）三月下旬、竹富村長玉盛淳博氏をとおして疎開の命令が、波照間出身の村会議員仲本信幸氏に伝えられた。仲本議員ができないと、つづねて村長を返したら、現われて来たのが一学校の指導員の山下であつた。

山下は、

「君は宮崎旅団長の命令に従わないと、言つているらしいな、何たることだ。非国民！」と高圧的な姿勢で出てきた。

「米軍は現に慶良間間に上陸しているのに、何で逆戻りしてこんなへんびな小島に上陸するか。上陸するなら沖縄本島や、本土に向かつてするはずだ。こういう情勢だのに波照間に上陸するから、マリアの地に疎開せよとは非常識な話だ……。」

とつづねられたが、また三日ほどして、「慶良間島に敵の潜水艦

から米軍が上陸して、島の有志をとらえられ、日本軍の配置がもれたのでやすく陥落した。波照間にもそのことがおこらないとも限らない。」と頭ごなしに迫つてきたとのことである。（波照間島仲

本信幸（四九歳）の証言）

（宮崎武之少将）の命令という形で、村長を、そして村委会員に勧きかけ、疎開を指示することができたのか、また、彼は西表に配備された護郷隊から配備されたと言われているが、どのような経路を経て学校の指導員として、配置されてきたのか、ナゾに秘められている。当時、西表の護郷隊にいた波照間島新城清吉（三十歳）は、「彼は酒井喜代輔といい、軍曹であった。徳之島に行くことになつていたが、空襲がはじかつたので行くことができず、波照間に指導員として派遣された。

私と二か月間（昭和十九年の十二月前後）は同隊にいた。他の上官に比べて臓病で、おとなしく思われ、敵機が見えたら誰よりも先にあわててかくれるようなもので、話に聞くような波照間での態度とは全くちがつていた。」といふ。

波照間赴任当初は学校の指導員という形で來たので、生徒とも交わり、父母の間にも親しく入つていったが、疎開の命令が出されると本性を現わした。ここに日本軍の巧妙な手があった。

疎開の命令が島に伝えられると、島民は周章狼狽した。それは山下の変身振りにもあった。彼はこれまでの長髪を切り落とし、半ズボンと長靴と軍服に身をかため、帶刀してたちまちのうちに軍人とした。そして校長をも、区長、巡回、村委会員をも彼の軍刀の支配下におき、島のすべての権力の上に君臨した。

疎開の命令が島に伝えられるとき、島では公舎（現在の公民館）や慶原山の洞穴の岩陰で、連日のように協議が行なわれた。最初の公舎での協議では、仲本信幸議員を初め、島をあげてマラリアの地に化した。そして校長をも、区長、巡回、村委会員をも彼の軍刀の支配下のものになつた。彼はこれまでの長髪を切り落とし、半ズボンと長靴と軍服に身をかため、帶刀してたちまちのうちに軍人とした。その内容は、米軍は波照間に上陸する恐れがある、そのためには南風見に賛成する者が多いのでその心配はないと言つて、南風見に賛成する者が多数だった。」と協議のようすを話した。

疎開の協議は洞穴のある避難地、慶原山の森の中の岩陰でも行なわれた。その協議に参加した上里真昭は、「慶原山の協議は、山下が区長をとおして集めさせた、と思うが、各部落の班長をはじめ北や南部落の部落民も多数集まつていた。はじめ、区長があいさつして、続いて山下が疎開について説明していく。その内容は、米軍は波照間に上陸する恐れがある、そのためには島は無人島にする、家畜も一匹たりとも残さない、最後は全家屋も焼き払う、井戸にも毒薬を入れる、反対する者は容赦なく斬る、と言つていた。

その後、協議に入り、どのような態勢で疎開するか、班別にするか、出発の日時、疎開の場所、漁船をおろすこと（冬期は漁船を陸上げしておいた）その他の準備について話し合われ、これが最終的な協議で、その翌日から船をおろす作業にかかる準備は急速にすんだ。」と話す。

また、南部落の勝連スエ（波照間三十歳）は当日のようすを、「山下は半ズボンをつけ、茶色の長い軍靴をはき、日本刀を二つ下げていた。誰かがこんな小さな島には米軍は上陸して来ない、洞穴があるから心配がないので疎開には反対だ、という声がすると、山下は顔を真赤にさせて怒り、日本刀を抜刀してサッサッと振りまわ

ついたが、空襲がはげしかったので行くことができず、波照間に指導員として派遣された。

私は二か月間（昭和十九年の十二月前後）は同隊にいた。他の上官に比べて臆病で、おとなしく思われ、敵機が見えたら誰よりも先にあわててかくれるようなもので、話に聞くような波照間での態度とは全くちがっていた。」という。

波照間赴任当初は学校の指導員という形で來たので、生徒とも交

本性を現わした。ここに日本軍の巧妙な手があった。
疎開の命令が島に伝えられると、島民は周章狼狽した。それは山下の変身振りにもあった。彼はこれまでの長髪を切り落とし、半ズボンと長靴と軍服で身をかため、帶刀し、たちまちのうちに軍人と

化した。そして校長をも、区長、巡回、村委会員をも彼の軍刀の支配下におき、島のすべての権力の上に君臨した。

疎開の命令が島に伝えられると、島では公舎（現在の公民館）や慶原山の洞穴の岩陰で、連日のように協議が行なわれた。最初の公舎での協議では、仲本信幸議員を初め、島をあげてマラリアの地に

うにかかる、恐いのはマラリアだと言っていたが、多くの人々はマラリアよりは空襲を恐れていた。由布島は小浜にも近いし、空襲の恐れもある。南風見は洞穴も多いのでその心配はないと言つて、南風見に賛成する者が多数だった。」と協議のようすを話した。
疎開の協議は洞穴のある避難地、慶原山の森の中の岩陰でも行なわれた。その協議に参加した上里真昭は、

一 聽原山の協議は、山下が区長をとおして集めさせた、と思うか。各部落の班長をはじめ北や南部落の部落民も多数集まっていた。はじめ、区長があいさつして、続いて山下が疎開について説明していく。その内容は、米軍は波照間に上陸する恐れがある、そのためには島は無人島にする、家畜も一匹たりとも残すな、最後は全家屋も焼き払う、井戸にも毒薬を入れる、反対する者は容赦なく斬る、と言っていた。

その後、協議に入り、どのような態勢で破曉するか、班別にするか、出発の日時、疎開の場所、漁船をおろすこと（冬期は漁船を陸上げしておいた）その他の準備について話し合われ、これが最終的な協議で、その翌日から船をおろす作業にかかるて準備は急速にすんだ。」と話す。

また、南部藩の勝連スエ（波照間三十歳）は当日のようすを、「山下は半ズボンをつけ、茶色の長い軍靴をはき、日本刀を二つ下げていた。誰かがこんな小さな島には米軍は上陸して来ない、洞穴があるから心配がないので疎明には反対だ、という声がすると、山下は顔を真赤にさせて怒り、日本刀を抜刀してサッサッと振りまわ

「公舎の幹事だった花城辰末（波照間島二八歳）は、
また当時、公舎での協議のときは疎開をやれとの軍の命令であつたので、どうことになると、姿を転じて隼人になった。見せかけだけの教員であり、特務機関、一つの国内のスペイだつたと思う。公舎での協議のときは疎開は軍の命令だということで、山下が一方的に押しつけてくるので疎開をする、しないということは、話し合うことはできなかつた。」

「山下は最初は教員という形で仮面をかぶつてきたが、疎開といふことになると、姿を転じて隼人になつた。見せかけだけの教員で、いぶん激論したが、彼の抜刀威嚇の前には勝てなかつた。当时、公舎の総代（総務）でその協議に参加した新川真那は「最初の協議のときは山下が来て、疎開せよと一方的な命令で反対する者は斬る、牛馬も皆殺す、家も火をつけて焼き払う、井戸にも毒薬を入れる、と押しつけるだけで字民の声など全然聞かなかつた。」と証言し、南部落の役員をしていた佐事安祥は次のように話した。

ここに疎開をするか、どんな方法でするか、準備はどうするかといふことが主に協議された。仲本信幸さんは、疎開はぜつたいしないと云つて山下とわたりあつたが、田畠区長や部落民の中にも空襲で野原家も焼かれるし、空襲もはげしくなるはずだから、島に落ち着いておれないとい、いう者もいた。

仲本さんは政府をするなら、マラリアのない由布島にするといつたが、部落民の多くは由布島は遠くもあるし、また、夜の航海だし、由布には船の入り口もないで荷物の運搬にたいへんだといった。

して、自分の言うことに反対する者はこの日本刀で斬るとおどした
ので私たちはおどろいて、ふるえながらそのようすを見た。
山下がそうすると、誰ひとりもの言う人がいなかつた。」

と謹言している。
この慶原山での協議を最後にして、翌日から疎開の準備にかかり、準備は急速に進んだ。

3 軍の家畜の戻喰御用

一家畜の生地獄の悲劇

病院の準備は班別に食糧や荷物をまとめ、荷造りすることから始まつた。穀物類はあさ袋やわらで作った俵に入れて荷造りした。非常食として携帶できる袋にかつお節とはつたい粉を入れて非常時にそなえて各自の分を準備した。また、マラリアの特效薬キニーは入手不可能なのでヨモギ、ニンニクなどを大鍋に入れせてせんじ、その液を広口びんに入れて漢方薬にした。

各戸では豚、山羊、にわとりなどを処分し、塩づけにしてびんやかめにつめ、肉はくん製にして俵にした。各戸では自家の豚、山羊、にわとりなどを処理するだけでせいいっぱいで、大きな牛馬には手をつけることはできなかつた。牛馬は各班で二~三頭殺して肉を各戸に分配していくん製にした班もあつたが、多くの班は牛馬の処理について、精神的な余裕がなかつた。

た自分の牛馬を自分の手で殺すことは農民には耐えられないことであつた。それで他人に自分のものから殺してくれと、お願ひしてまわつた。

当時、波照間では牛馬は大切な労役で稻作の時期になると、水田の整地に二三頭の牛馬を連ねて水田を踏ませたので、各戸には三四頭、なかには十数頭の牛馬を飼っている農家もあった。疎開前は当地では牛馬八〇〇頭、豚四〇〇頭、山羊一七〇〇頭、にわとり五〇〇〇羽が飼育されていたと言われ、家畜の豊かな島として知られていた。

疎開が開始されると、軍は島の豊かな家畜の徴用に歟医の広井修少尉、粟原軍曹らが博効の嘉手刈恒優、高良吉雄と当地出身の仲筋米三らを伴なってやってきた。

屋久（地名）の洞穴の中で全島の家畜の屠殺、処分についての協議が行なわれたとき、徴用に来た広井少尉、粟原軍曹らは、「君たちは西表島に疎開することになっているので疎開地に持つて行ける家畜は持つて行きなさい。君らの持つて行けない分を取るために来たのだ。島には一匹たりとも残すな！ 残したら米軍の食糧になり、利敵行為になるから全部殺せ！」

と言つてまるでわがもののような態度で抜刀して命令したのことである（宇波照間仲本信幸（四九歳）の証言）。

食糧、特にたんぱく質に窮乏していた軍にとって、この波照間島の豊富な家畜は恰好のものであり、そのうえ波照間には、当時進幸丸、朝日丸、豊福丸、昭洋丸、大福丸、開洋丸のかつお工場が六つあり、そのかつお工場の大釜、大調理場、乾燥屋（バリカン屋）石

炭、薪、などの加工施設、資材は豊富な牛馬の加工にも最適のものであった。この豊富な家畜と唐また加工施設を使って食糧を確保するためには強制疎開という手段に出たと憶測されるのもあまりにも条件が整っている。

家畜の徴用に来た軍はかつお工場にも近く、木が多く、防空のために条件のよい富嘉部落の大嶺家、崎枝家、西島本家を宿にしていた。大嶺真那（波照間島六十歳）は当時のようすを次のように話した。

「私が疎開地へ荷物を運搬して、島に帰つてみると私の家に彼等が泊っていた。私の家の後の森の中や、近くの木の下にはたくさんの牛がつながれていた。部落民は疎開地へどんどん行つてしまふので、島に残った部落の役員や青年たちが軍に殺させるために連れてきたものだった。軍の炊事は隣の岐枝家でやつたが、そこにはいつも肉が木の枝に下げられていた。軍は島の青年たちを使い、昭洋丸のかつお工場で製造して軍が連れてきた船で運んで行った。その船長（宮城）は私の家で病氣で死んだので石垣に連れて行つて葬式した。」

軍は島から防衛召集された青年や、島に残つてゐる男女青年の中から各部落三四名ずつ、計二十余名を動員して屠殺と加工にあらせた。屠殺班のひとりである石野清峯（波照間島十七歳）は次のように言つてゐる。

「私は防衛召集されて石垣に行つたが軍の命令で家畜の徴用に島に行かされた。島に残されている青年たちとその任務にあつた。男子は屠殺し、女子はかつお工場で加工にあつた。私たちが来る前

にも山下が命令してたくさん殺させ、あつこつちに殺したまま肉も取らずに、木の枝をかぶして腐らしてあつた。私たちは集められたものや、野原につながれているもの、逃げまわっているものを殺した。捕えられないものはそのままにしておいた。その数はそう多くはなかつた。私たちが屠殺した場所はブルマ山（現在の波照間製糖工場の事務所の位置）のヤラブ木（テリハボクのこと）、その木は屠殺のときの血のために立枯れてしまつた。の下で殺し、肉を取つて骨は近くに山積みしておいたが、終戦後近くの焼鉢の穴（廢坑のあと）に捨てた。（現在もそこには白骨が山積みされている）。

肉は昭洋丸のかつお工場でくん製にした。女たちが小さく切つた肉をかつお節製造用の大釜に入れ、海水で煮て、バリカン屋（乾燥屋）でくん製にした。煙がたつので空腹が心配であつたが、一回あつただけで被害はなかつた。くん製にしたものは荷造りして軍が手配した船で軍に送つた。」

吉村清（波照間 四六歳）は徴用に來た軍の横暴ぶりを次のように話した。

「軍が徴用に來る前は牛は班で殺してくん製にして疎開地へ送つたが軍が来てからは軍が取り上げて疎開地には一頭も送つてない。私の牛は一頭は班で殺して肉は班に分配したが二頭は野原で殺して肉も取らずにそのままにしておいた。豚やにわとりはできたら疎開地へ持つていくつもりで、殺さず残しておいた。にわとりは二十数羽を床下にかこつておいたが、ある日畑から帰つてみると、それがみんな軍に使われている青年たちに取られてしまつてるのでその青年たちにどなつたら『軍の命令でやつた』といつたので、その軍人を

『そんなら君のものはみんな持つて行きなさい。それができるものなら……』

と言つたので私は『私のものはみんな持つていく。』と言つて受け取りに行つた。私の家の前の安里家には、軍が集めたにわとりを網で囲つてあつたのでそこに受け取りに行つたが、一部のにわとりは彼等が殺して食べ残つたものは彼等が集めたたくさんのにわとりの中に混つてしまつてわからないので結局一羽も取りかえことができなかつた。私はおこつて、

『君等のやり方は日本軍人のやり方ではない。私も軍隊にいたがこんなことをやれとは教わらなかつた。波照間に来ている日本軍人はこんなざまをしていると八重山の旅團長に知らせてやる』と言つてやつたが、その少尉はできるものならやつてみろというような態度をしていた。

また昭洋丸のかつお工場使用の件で軍とわたりあつたこともあつ

た。

彼等が引き上げる前になって、軍の牛肉の製造の責任をしていた嘉手刈に軍のやり方があまりにもひどいので、さんざん文句を言ってやった。他人の工場を何と思っているのか西表からかつお製造のために取ってきて山積みしてあった薪をみんな使い、船の燃料の石油や工場の道具は使い放題でがまんできなかつたのでさんざん言つてやつたら嘉手刈が広井少尉に伝えたとみえて、軍から昭洋丸のかつお工場の責任者来いとの呼び出しがあつたので私が行つた。広井少尉は、

『この人が軍に文句を言った人が、かつお工場の謝礼として一五〇円やる』と言つて一五〇円を出してきたが私は、『こんなもの受け取れない。これだけで工場の補償ができるものでないし、また、島のあれだけの牛を殺された字民に対してもこれが受けのものを受け取るわけにはいかない』

と言つてことわつたら、

『この金は私のものではない。君が取らなければそのしまつに私が困る。少ないかも知らないが軍にはこれだけしかないのでこれだけしか上げられない。君が取らなければかつお工場の組合員に対しても言い訳がたたないので是非受け取つてくれ』

と言うのでしかたなく受け取つた。日本軍は波照間でたいへんなことをしている。特に山下などはきつね同然だ』

と今だに日本軍の横暴ぶりに怒りをぶちまけていた。

また当時昭洋丸工場の会計をしていた川平新勝（波照間 四九歳）は、

「昭洋丸のかつお工場を使つていた軍が引き上げて行つたと聞いた

ので、私は当時会計をしていたのだが、船長（吉村清）と連絡ができず、私自身で工場の使用料、資材の補償を請求して広井少尉宛に手紙を出したら、十二月になつて返事が来た。その手紙は今も持つているが、他人の工場を勝手気ままに使つて、その謝礼は微々たるものだった」

と言つて手紙を見せてもらったが、その中には「五月十二日工場使家畜の徵用に來た車が引き上げて行つた後も島には逃げまわつているものや、後のことを考へて残してある家畜がいくらかおつた。それを知つた山下は疎開地からわざわざ全滅させるために使いを派遣した。その命令を受けた上里真知（波照間 十八歳）は次のよう

に証言している。

「疎開をして二十日ぐらい過ぎた頃、山下は私に、

『島にはまだ家畜が残つてゐるらしいから、使いをやるので君が責任をもつて島に残つてゐる家畜を一匹残さず全滅させて來い』

という命令を受けたので、七〜八名の青壯年を連れて豊福丸で島に行つた。島には逃げまわつてゐるものやつながれでいるものもいた。つながれでいるものは手綱のとくだけの草を食べつくし、その足跡は土を深く掘り下げるほどで、骨と皮になつてゐるものもいた。疎開から引き上げてどうなるかわからないので、逃げまわつているものはそのままにしておいて、つながれでいるものだけを殺そ

うということで手配して殺した。私はガナバリ（地名）のヤラブの木の下に集め、十七頭殺した。もちろん肉を取る余裕もなく、殺し

た』と報告した」

馬の屠殺にあたつた上里真昭は次のように話した。

「馬は疎開地への物資の運搬に使つたので、最後まで各班には二〜三頭ずつ残つていた。軍が徹底していったのは牛だけで、馬は残してあつたので私たちは専ら馬の屠殺にあたつた。老人たちが集めてしばつてあるものを私たち若い者がまわつて殺した。馬は牛より知恵があるし、ずいぶん殺すのに苦労した。一日で一三頭までは殺すことができた。それは殺してその場に倒しておくだけで、肉は一四からも取つてない』

また佐事安祥は屠殺のもようを次のように話した。

「マグロ網の一方の端を木の幹にしばりつけ、その網を牛の首にかけ、他の端を引っければ首がしまるようにする。最初から木にしばりつけると牛があはれて殺されない。また他の一人は牛の片足をしばった網をつかみ、手斧を持った人の一、二、三の合図で首をしめると同時に手斧を頭蓋骨の急所深くたたき込み、その拍子に片足をしばつた網をつかんだ人が引張つて横倒しにして頸動脈をほうちようで切つて即死させる。肉を取るときはまだ血が体内を流れているうちに皮をはぎ取る。慣れない人は皮をはぎ取つた牛は血管があざやかに見えて、無氣味で見きれないものだ。

私は南部落の役員をしているので、自分で殺せない連中は私の所に連れてくるので処理しなければならず、慣れたものだつた。ある

『おお、軍隊ではその訓練を受けてきたので万ーの場合は仕方がない』

と冗談で言つたが、当時は殺氣たたた事態だから、そんなこともしないでかしかねないと、いう状況だった』

また、疎開地から収穫のために島に來た仲底善祥（波照間 四一歳）は、

「船が島の近海に來ると海上にも異様な臭いがただよい、上陸してみると島のいたるところに牛馬が殺されて腐敗し、道の西側の木の枝にはギンバエが枝の垂れ下がるほど着いていてまるで生地獄のようだった』

と當時、この島は家畜の生地獄さながらの様相であつたと、証言している。

4 死のマラリアの地南風見へ

屠殺と荷造りなど疎開の準備をすめながら、先遣隊として各班から数名ずつ南風見へ派遣した。先遣隊は疎開の場所を定め、各班の荷物が収容できるような仮小屋を各班に一棟ずつ造つて疎開民を迎える態勢を整えた。

場所は北、名石、南の三部落は南風見田の東の方に、前と富嘉部落は南風見田の西の方のシタダレ川の近くに走めた。東の方は広い砂浜と原野に恵まれ、岩陰や洞穴も多く空襲にはよかつたが川の水

が濁っており、マラリアも多いところだつた。一方西の方は山が海岸にせまつたところで、耕地がなく、かやも少ないので家を造るには不便であつたがシタダレ川の水は澄み、マラリアの少ないところであった。

一九四五年（昭和二十年）四月八日、先遣隊の受け入れ準備もできて、いよいよ疎開地へ第一陣として、名石と北部落の班から進幸丸第二号（船長上里真知）と大福丸（船長大嶺幸吉）で出発した。

上里船長はそのときのことを次のように話した。

「最初の疎開地への航海は南風見への航路も不明で、夜航であったので、大原の仲間川の川口の小島（カラス島）に人と荷物をおろした。大原から南風見田へ二里の道のり荷物を運ぶことは、道路の整備されなかつた当時はたいへんものだつた。これではたいへん」ということで、南風見田に南風原口という船の接岸できる場所があるというので、そこをさがして山から木を數十本切り出してポールを立て、夜の運航の標識にした。その後は潮時をはからつてそなから運航した。」

その後、毎晩のように、進幸丸第一号（船長上里徳喜）、進幸丸第二号、大福丸、豊福丸（吉良定勝）の四隻で疎開地への輸送にあつた。子どもから、老人、病人を連れ、また家財道具を持って、夜間の漁船での運航は、たいへん苦難なことであつた。南風原口で漁船に空襲を受けてからは鹿川湾に荷物を下ろし、そこから山道さえないところを南風見、由布へ荷物を運搬することはたいへんなことであった。

疎開開始の日にお産を迎えた波照間ヒサ（波照間三三歳）

は、「疎開が始った日、その日は、私の部落（名石）の一班から出発することになつて、いたが私はお産にあつたので、部落では疎開に行つてしまふし、空襲の心配もあるので、ペミシク（地名）の畠小屋でお産を迎えた。産婆もないので私の母にお産をさせてもらった。夜になると畠小屋は静まりかえり、親牛を殺された子牛がひつきりなしに泣く声が聞えて、この子も疎開に行つたらこんなことになりはしないかと思われて、泣かされた。産後十三日目に疎開地へ行つたが、夜間の船旅はたいへんものだつた。その子は幼名をナベと呼んだが、出生届もできないので正式に命名もしないうちにマラリにかかり、生後五ヶ月して死んでしまつた。」

とその当時の苦労を話し、また船の中で陣痛をおこした東里ミヨも、

「旧三月三日の晩に私たちは疎開地へ出発したが、夜中の三時頃から陣痛が始まり、明け方西表に着いた。上陸して二里の山道を南風見まで母に連れられて歩いたが、周期的におこつてくる陣痛のあいだをどのようにして歩いたか知らない。その子は南風見で元氣に育ちはしたもの、栄養不足で乳が満足に出ないので、おもゆをつくりて飲ましたが、子どもがかわいそうでたまらなかつた。疎開解除で子どもは元氣で波照間に連れ帰つたが、まもなく私もマラリアにかかり、母体の栄養失調とマラリアで衰弱し、その子はみるみるうちにやせ細り、九月に生後六ヶ月で死んでしまつた。出生届も出しができず、入籍もしなかつた。当時は生まれたものの、出生届もできないので、入籍しないまま死んでしまうものがたくさんいました。

た」

と当時の悲惨な事態を話した。疎開は、病人、妊娠婦、老人、子どもをまわす非情にも強行されたのである。

また公務を預かる人々の苦労もたいへんなものだつた。国民学校（校長難名信升）においては重要書類や器具も職員と共に疎開地へ持つて行き、学童は父母とともにまた職員も部落民とともに疎開した。（なかには政開地へ行かず石垣島へ逃げ出す者もいた）。四月二十九日には疎開地に仮事務所一棟を建て、重要書類を保管し、また学童の訓育にあつた。

当時、波照間郵便局長だった仲底善祥（字波照間 四十歳）は「私は当時郵便局長をしていたので、郵便局の重要書類、帳簿は私といつしょに持つて疎開した。金庫以外のものはほとんど持つて行つた。私は自分の家の家財道具でもせいいっぱいだのに郵便局の荷物まで持たされて、その苦労といったら話にならなかつた。郵便物は古見の配達人と連絡をとつてやつた。八重山島の焼けないまでは貯金の支払いまで南風見でやつたが、それが焼けてからはできなかつた。郵便局の荷物はそのまま持ち帰ることができたので、帳簿書類関係は一つも紛失することなく、戦後の事務処理にはたいへん助かった」と公務をあざかれた者の苦労を話した。

また疎開地での生活のようすを次のように話した。

「疎開地ではすべて班単位に組織され、家も班単位に建てられ、寝食ともに班ですべてやつた。家は防空のため木やアダンの下をたよりに細長く造り、中央に通路をとおして両側に寝るようになつた。また厳重に偽装した。梅雨期にあつたので木の下の家ではじめじ

め湿つて住み心地の悪いものだつた。特に便所は砂地を掘つて造つたので雨でくずれ落ちたり、ウジムシが上まであふれてきて何回も場所を移動した。

住み家は海岸近くに造り、第一避難所と呼んでいた。山の中腹には第二避難所を造りそれはマラリア蚊や毒虫を防ぐために床を高くし、床下から山ビバージの葉でいぶすように造られ、食糧を運搬して交替で番人をつけて警備にあつたが第二避難所へ運んだ食糧は白アリにやられるのが多かつた。またハブのいない島で育つたのハブが心配であったが、ハブはたくさん殺したが、幸にしてそれしかまれた人はひとりもいなかつた。

更に山の頂上近くには第三避難所をつくり、非常事態にそなえたが、それは仕上げるまでにはいたらなかつた。第三避難所から見下すと、新城島、黒島、波照間島は下の方にはつきりと見えた。波照間の開洋丸、豊福丸工場が空襲でやられるのがはつきりと見えた。そのようすを見ると『崎山節』で『波照間ヒ、生り島ユ見上ギリバ、我家ヌ母、産シャル親ヌ、眞面見ルソンヌ、見ラデシバ、目涙マリ見ラヌ』と歌われた昔のことが思いうかべられ、昔の歴史は今まで自分たちの上にあるものだと考えさせられたものだ……。

疎開地では全くコウモリの行動と同じで、昼は行動できないの事の準備も夜は灯がもれると敵に知られるというので朝と夕方のうちに準備したが、煙を立てないようにと気を配つたものだ。朝も早く起き、朝は空襲がないので、開墾などのしごとは朝のうちにし大原は『南進部落』と言つて移民計画の部落で、豊原のところ

も、移民計画のために開墾に手をつけてあつたので、耕作には助か
つた。大原部落から水牛を借りてきてすきおこし、いもを植えた
が、収穫しないうちに引き上げてきた。」

「二百年前、首里王府（尚穆王時代）によって波照間の住民が西表
の崎山村に強制移住させられたことが、今まで日本軍によつて同じ
ことがくりかえされたのである。」

また大原部落は当時「沖縄県振興十五ヶ年計画」（昭和八年～二
二年）によつて開発が計画されていた。それを受けて時の八重山支
庁長大舛久雄氏（新城島出身）は新城島の住民を大原に移住させて
開発しようとしたが、それがすすめられていたが、マラリアのために
その実施が困難であった。大舛支庁長と軍がかかりあつたかどうか
は不明だが、大原、南風見の開発のために黒島、波照間の住民を
強制疎開させたのではないとの憶測があるのもその時期が一致す
るからである。もし、そうだとすれば、マラリアの地、西表の開発
のために再び波照間の住民が犠牲になり、現代版「崎山節物語」の
悲劇が演じられたのである。

疎開地でも食糧確保のため開墾し、耕作したものの、すぐ収穫で
きるわけではなく、食糧の欠乏は日に日に迫ってきた。そのため六月
八日、第一回「決死収穫隊」として各班から選出し、総勢六名を
粟の収穫のために波照間島に派遣した。収穫隊は鹿川湾から日暮時
に豊福丸で出発し、収穫を終えて六月中旬無事鹿川湾に帰った。
そのときに、日本軍の遭難兵が波照間島に漂着していた。その世
話にあたつた花城辰末（波照間島二十五歳）はそのようすを次の
ように話した。

「西田原さん、金武さんと私の三名は炊事係をしていたが、その話
を聞いたので見に行つたが、二人の兵隊は死にそうであった。かわ
いそうに想ひ、食べ物を持って行つて上げたらそのお礼としてミシ
ン糸を二個ずつもらつた。南風見に連れて来て、彼は小浜に送ること
になつたので、米盛トミ先生はこの兵隊たちはヤシの実を食べて
生命が助かったということで、『ヤシの実』の歌を私たちに教えて
もらい、私たちはその兵隊に『ヤシの実』の歌を歌つて聞かしたもの
のだった」

その兵隊たちは山下が由布に連れて行き、由布から夜航で小浜島
に送り届けられた。当時、小浜島に竹富村役場があり、海軍の特攻
部隊が駐屯していた。

六月二十六日には第二回決死収穫隊、一四七名が島に派遣され、
稲の収穫を終つて七月中旬に帰つた。
南風見のほかにマラリアの少ない古見部落や遠く由布島にも疎開
された。

「疎開地から粟の収穫に夜行してきたが、翌日の朝、部落をまわつ
て来ると阿保勢家の附近に人が二～三人居るので、誰も島にはいな
いはずだと思つてびっくりした。よく見るとひげを伸ばし、髪も伸
び放題であるので、ほんとにアメリカ兵が上陸したのではないか、
これはたいへんなことになつたと思って、行こうかどうしようかと
迷つたが、こうなつては下れないと思って思い切つて行つてみると
日本兵であったのはほつとした。ここは日本の最南端の島で、どう
ゆうわけで住民がないかということなど話したら、彼らも安心し
て喜んでいた。彼らは五日前に漂着したが食べ物がないので、空家
をまわつていもやねぎ、お米などさがしたが火が見つからず、やつ
と空家からマッチをさがしたと言つた。井戸の側の木に小豚と
にわとりを殺して下げるがカヌーが見つかつたので、そ
れにヤシの実を積み込み、台湾へ向けて来たが漂流し、途中で死ぬ
者は水葬してやり、やつと四名生き残った。西表の崎山島まで流さ
れたがまた南に流れ、朝の十時頃、波照間の南風泊の海岸に流
れ着いたらしい。衰弱しているので、海から陸に上がるのに二時間
かかって綱で引き上げたり、引張つたりして上陸したらしい。軍曹
の一人は仮死状態になり、自分は助からないから捨ててくれと言つ
たが、せつかく陸地に着いたら、生命は必ず助かると励まして連
れてきたと言つていた。その中の一人はワニマンなものがいて、ヤ
シの実は限られてるので、一日にどれだけと決めて食べていただよ
うだが、彼は力づくで他人のものを奪い、多く食べたので体力は衰

した。古見部落には、名石部落の石野家三戸と後富底家、南部落の
加屋本家と辻野栄次調導が親せきや知人をたよつて疎開した。
由布島には仲本信幸村議のすすめで、彼の班（富嘉一班）と前部
落の彼の親せきの上里家、東盛家、前花家が疎開した。南風見にマ
ラリアの罹病者が増えると山下も彼の宿（西島本家）の家族を連れ
て島に移つて来た。

由布は小さな離れ島でマラリアがなかつた。そのうえ、対岸には
肥沃な土地があり、与那良田には水田を開墾し、整地までやつたが
夏で時期が合わず、作付するにはいたらなかつた。また西島台地を
開墾して畑にし、いもを植えた。役牛も島から連れて行つたので耕
作に助かつた。また山羊は木の下で阴つて飼い、その飼育は学童た
ちがあつた。また小浜島に近いので必要な物資は小浜島からかつ
お節や塩と交換してきて供した。由布への空襲はなかつたが小浜島
からの流れ弾が来たときもあつた。上陸にそなえて山奥に避難小屋
を作れと村役所から指示があつたので、古見岳の前の川の上流に避
難小屋を造つて、食糧を分けて運搬し、番人を交替でつけておいた
が、ほとんど利用しなかつたとのことである。（由布については仲
本信幸の証言）

由布には波照間からの疎開民のほかに竹富島や黒島からも疎開し
て來た。

5 横暴な特務兵山下

疎開が実施されると学校の指導員から軍人に変身した山下は、も
ともと学校の指導員として赴任したので、軍の階級も不明で、自か

ら少尉とか中尉とか名乗っていた。旅団所属の上等兵仲筋米三は家畜の徵發に来た時の山下について次のように話した。

「私が広井修少尉と家畜の屠殺のために波照間に行つたら、島の人々は山下という中尉が来て、たいへんなことをしているというので、旅団所属の中尉には山下という軍人はいないが誰だろうと思つていたら、私たちが大領家に移つた晩彼がやつてきた。それは酒井軍曹であった。

私たちちは彼を酒井軍曹としか知らない。何故に山下と名前を変え、中尉を名乗つたか不思議でならなかつた。彼は広井少尉のままで、酒井軍曹と名乗り、身震いしながら自分は護郷隊としてこの島に来て、疎開を指導していると報告していた。私はなぜ酒井がそれほど身震いしながら報告していたのか不思議でならなかつた。上官の前であるし、また名前、階級を偽っていたからだと思ったが、彼の報告を聞いていると疎開の一切の命令、指示は彼の責任で行ない、彼が勝手気ままに行なつていたからではないかと思われた。」と証言している。

波照間には壯年たちはみんな防衛召集され老人と婦人、子どもたちしかいないし、軍人は山下一人しかないので、彼は軍隊については彼以外に誰も知つてゐる者はいないと考えていたらしい。退役軍人の一人である佐事安祥は、

「疎開地で班長会の後、イノシンを撃ちに行きたいが誰か鉄砲を使える者がいるかというので『はい、私ができます』と言つたら『おお、いたのか。君は軍隊の経験があるか』というので『はい、私は大正十二年兵、佐賀の五五連隊第十中隊の二番ラッパ手だつた』

疎開地へ最後に運航した晩、山下は巡査をはじめ住民三〇〇～四〇名に暴行を加えた。

それを見た仲底善祥はそのことを次のように話した。

「その晩は前、名石、富嘉部落などの最後に残つた疎開民が出発することになつてゐたが、集合が遅いし、また、船の能力も考へないで勝手に荷物を積んであるということで、巡査もいながらこんなことをするのかと言つて、巡査をはじめ、部落の大人たち三〇四〇名が彼にたたかれた。特に龜浜巡査はひどくたたかれ、けられ、溝に仰向けに押し込まれ、暗がりで見ていた人々には、巡査は死んでしまつたのではないかと思われるほどだつた。彼は巡査であろうが、議員であろうが、彼の思うとおりいかなければ、抜刀してかかつてきて子ども扱いにしたものだ」

また、北と南部落の班の荷物を運搬した翌朝同部落の班長ら数名が彼に暴行を受けた。その一大泊ミツは、

「ある日、波照間から帰つてきた山下さんは各班長と炊事係集合しろという命令でしたので、四～五人の班長と女は私一人集まりました。体の大きい山下さんは太い長い棒で力いづばいひとりひとりたきました。弱い私はたたかれると同時に地べたに倒れたのです。何の理由でたたいたのか、今でもわかりません。」

と話し、そのようすを見ていた勝連スエは、「それは山下が波照間からくん製にして持つてきた自分の牛肉の俵が見つからないのは班長に責任があるということで、北と南部落の班長を南部落の一班小屋の前に集め、一列に並べて手を上に上げさせて、生竹の一メートルぐらいあつたものでたたき、それが割れ、

と言つたら、『おお君は平和時代の教育を受けた軍人ではないか。その時代の軍人はりっぱだ。では、いつしょに連れて行く』と言つた。弾はいくらあるかと聞いたら五発しかないというので、それだけでは何にもならないと言つて行かなかつた。そうしたら彼は私と力勝負しようと言つてきた。ちょうど自涙に行つたときでんま船がいたので、てんま漕ぎ競争をしようというのでやつた。当时、私は四十二歳でまだ元気はあつたし、また、かつお工場でてんま漕ぐのは慣れていたので、私にかなうはずはなかつた。彼は私に負けたので次は何かで負かしてやると言つた。

またある晩は波照間の桟橋で貨物を荷造りした三斗俵を青年たちを使って船に積んでいたが、夜の三時半を過ぎているし、潮がひきかけて、干潮になつたら船が出られないということで、青年たちをいそがせていたが、なかなかうまくできないので自分がやることで山下がやつたが、彼は三俵だけ投げてへこたれてしまつた。私にも手伝いしてくれというので八〇俵余りの俵を船に投げてやつたら『君にはかなわない』と言つていた。

その後は私には一目おくよくなつた。彼は軍隊について知つてゐる者は島には彼以外にいないと考え、また彼より強そうな者は必ず負かして彼の支配下におこうとした。彼は島の人たちを畜生同様に考へ、馬鹿にしていた」

島には日本軍人は彼一人であるし、彼は軍政下だから軍人である彼には何でもできると錯覚したのか、島のすべての権力の上に君臨し、学校長、巡査、区長、議員などすべて彼の軍刀の支配下においていた。

また私は班の倉庫の係で、島尻さんは炊事班長をしていたが、毎日食糧の使用量と残量を山下に報告した。その報告にすこしじのがいがあると釜にあるごはんのついたしゃもじでたたかれた。島尻さんは貧乏班のくせにせいたくに食べさせているということで、何回山下にたたかれたかわからぬ。私の班は分家が多いのでどちらかといふと他の班より食糧は少なかつたので、貧乏班と言つて馬鹿にしていた。山下はある班はお米班、この班は粟班、私たちの班はソテツ班だと言いふらしていた。島尻さんと私は無理がたたつたのか班では、誰よりも先にマラリアにかかつてしまつた。山下は私たちの寝ている小屋に来て『班の生命になる倉庫と炊事を預かる者が先に倒れてはどうなるか。誰に引継いだのか』と言つて寝ている私たちにどなつたので、うちのばあさんと島尻のばあさんがたまりかねて山下に、病人にまでそんなにしかるのかと言つて山下は老人に追いかえされたこともあつた」と話した。

山下は疎開地に来ると国民学校の四年生以上の学童と防衛召集されない男女青年たちを集めて「挺身隊」を組織した。挺身隊は挺身隊館として一棟の小屋をつくり、中央から通路をつくつて両側に男

子、女子に分けて共同生活をした。挺身隊の任務は荷揚げ作業、船の偽装、避難小屋造り、清掃、警備などで、夜間も不寝番をおいて警備に当たった。彼等は各自ナイフと縄を巻いたものを常時腰に下げ、各自でつくった戦闘帽をかぶっていた。いわば未成年者の軍隊であった。彼等は毎朝ラジオ体操をし、日中は日程に従って共同作業をし、夕方は砂浜に集合して教化訓練を受けた。指導者は山下と波照間出身の青年学校の教師、石野盛正であった。この挺身隊の指導員らは教化訓練という名で学童、青年らを酷使し、虐待した。

挺身隊のひとりであった波照間島新盛良政（十九歳）は「ある日、私たち挺身隊は、真夏の日盛りの午後二時頃から五時間も着い砂浜で教化訓練ということで体罰を受けた。理由は清掃ができないない、ハエを取るのが少ないということだった。私たち挺身隊全員を砂浜に二列に並べ、石野が男女かまわずひとりひとりを生竹のちぎれるほどたたいた。私は二～三回たたかれると目まいがしたので、そのまま前にうつむきになつて砂地に倒れ、腹が痛いと言つて難をのがれたが、立っている者はどんどんたたかれた。最年長の富底康佑は特にたたかれ、彼はそれが原因で死んだ」と言つている。また、富底康佑の姉の上盛ミツ（二十九歳）は、「石野は挺身隊の子どもたちをハエを取るのが少ないといつたそなだけの理由で、名石三班の前の浜に並べて、生竹がちぎれて一節になるほどたたいたり、けつたりした。私たちはそれを見て、生命が欲しくてこんなところに疎開して來たはずなのに、何の罪があるて、成長ばかりの子どもたちをそんなにたたくのかと思うと悲しく、またにくらしくてたまらなかつた。それを見ていた親たちはみ

な口を揃えてそういった。康佑（当時高等科二年）は腰から横腹にいたかれた跡が黒くふくれあがり、それが痛いといって横になつたとき、それを病氣にして南風見で死んでしまつた。

疎開地から引き上げて四～五年後に、南風見から骨を拾つてきました。康佑のろつ骨は折れていたという話もあるが私は見ていないのではつきりしたことはわからない」と話す。

と話し、また、西島本サダは

「私の妹の敏子（仲底敏子、当時十歳で四年生）は、山下の部下の石野にたたかれ、尻から左横腹にたたかれた跡が青紫にはれがあり、それがマラリアにかかると熱が出るときにはあがり、脇れて黒ずんだ汗が出るとそのまま死んでしまつた。大仲文（当時十二歳）も同じようにそれが原因で死んだ。石野は何故に学童までそんなにたたかたのか、彼の心の内が知らない。彼はそのことで終戦後、島の青年たちに制裁を受けている」という。

山下と彼の部下石野は悪氣のない学童たちを強化訓練という名で虐待し、殺人的な犯罪行為をしたのである。また山下は挺身隊に弱盜を強要した。新盛良政は、

「山下は私たちにくくり舟を盗んで來いということだったので、古見に行き、海岸にあつたくり舟を盗んで南風見まで帆をかけてきたことがあった」と話し、また銘刈進は、

「山下は仲間川にダンベー（大きいんま船のこと）があるので盗んで來いということだったので仲間川の上流に隠してあるダンベーを取ろうと行つたら持ち主に見つかり、追われたのでその旨山下に

報告したら『みんなついて來い』というので彼について行つた。山下は日本刀をふりかざしておどしたら彼らは頭をべこべこ下げて、生命だけは助けてくれというのでそのダンベーを取り上げてきた」と彼の犯罪的な横暴ぶりを話した。

また彼は台湾人を彼の日本刀で虐殺したと自ら言つていたとのことである。新盛良政はそのことを次のように話した。

「私は山下が日本刀を肩にかけ、台湾人を一人たたきながら、シタダレ川の上流に連れて行くのを見た。

その台湾人は西表の炭坑で、奴隸のように働かされた者で、私たちの疎開地に朝鮮袋（カチガーバ）で作ったみそぼらしい着物をして、乞食のように食べ物を憲んでくれとやつてきたので婦人たちがかわいそだと言つて食べ物を与えたたびやつて來た。それを山下に見つけられ、山下は彼をスパイだといひ、ほかにもう一人台湾人が居るということで、それをさがすために川の上流に連れて行つたらしい。山下は帰つて来て、『他の一人は切つたが、ここから連れて行つた者は、逃がしてしまつた』と言つて自分の日本刀をふりかざしてアダンの枝を切り落していた」

同じく佐藤安祥も、

「私は山下が片手をしばった台湾人を一人連れ、彼は日本刀を肩にかけて、その台湾人をたたいたり、引張つたりして連れて行くのにシタダレ川の近くで逢つた。『何をしたのか』とたずねると『こいつは悪いことをした』と言つて西の方へ連れて行つた。それは午前十一時頃であったが、午後三時頃また山下が西から帰つてきたので

『さつきの人はどうしたか』と聞いたら『切つてきただよ』と言つて

帰つて行つたが、班のところに来てみんなに、台湾人を殺して來たと言つて彼の日本刀でアダンの枝を切り落し、血のついた日本刀をふいて手入れしていたとのことである」と証言した。

山下は台湾人を虐殺したのである。

いかに乞食のような身なりをした台湾人と言つても、そのようなことが人道上許されるべきでなく、彼はまさに殺人犯であったのである。

彼は疎開地の婦人たちにも「近いうちに避難小屋に行くから一張羅の晴れ着を用意しておけ」というので自分たちを殺すつもりかも知らないと思つて非常袋を用意したとのことである。（上盛ミツの証言）

狂気じみた彼は集団自決をも考えていたかも知れない。一步誤れば座間味島や渡嘉敷島の集団自決のような惨事をおこす寸前だったかも知れない。

このように非道極まる横暴をふるまつた山下を動かした日本軍の正体はいったい何であつただろうか。

彼は陸軍中野学校出身で、

「赤き心で 断じてなせば
身もくだけよ 肉また散れよ
君にさきげん……」

と中野学校の校歌と言つて女子挺身隊に教え、自ら国内スパイと言つていたとのことである。（加屋本シズの証言）

彼は陸軍中野学校でゲリラ訓練を受けた特務教員であり、大本営直属の「遊撃隊」（護郷隊）の特務将校で、西表島に駐屯する護郷

隊から派遣された。西表の護郷隊には波照間島からも新城清吉、前迎登、山田均、慶田盛光次、南風本肇、など派遣されたがナゾに秘められたことが多い。

山下はその使命のためには住民の生命や財産をも顧みないという日本軍の正体をむき出しにしたそのものであったのである。

6 人間の生地獄

—マラリアの悲劇—

疎開地では梅雨が明け、暑さが増してくるとマラリア罹病者も日に日に増加し、死亡者も続出するようになつた。罹病者の最も多かったのは、南風見田の東の方に疎開した北、名石、南の三部落であつた。そこにマラリアが多いということを知った南部落の三、四班は東からシタダレ川の西の方に移ってきた。その班長であつた佐事安祥は当時のようすを次のように話した。

「黒島の友人が私たちに『君たちはマラリアの最も多いところに来ている。西の方のナイーヌ浜（マラリアのないという意味でそのままに呼ばれたのこと）にはマラリアがないので、そこに行つた方がよいではないか』というので、そのことを南部落の部落民に話した。生命を守るために来たのだからマラリアのあるところに居ればマラリアでやられるから、マラリアのないところに移動しようといつて、田福さんと班長四名でそこを調査して部落民にはかつたら、一班と二班は老人と子どもが多かつたので、せつかく落着いたのに今さら苦労して移動する必要はないと言つて聞き入れないのである」。

島の人々は疎開地に行って初めてマラリアの恐ろしさを体験した。

マラリアは、アノフェレス（ハマグラ蚊）によって感染され、伝染力もつよく、感染するとひどい寒氣をもよおし、身震いが始まると、毛布やふとんを幾重かけても身震いがおさまらず、やがて身震いがとまるとき四十度以上の高熱を出し、なかには高熱で発狂することもある。二、三時間たつと熱がさめ、平常にもどる。また数時間すると寒氣をおこして熱発するというように、それが周期的に行なわれるうちに食欲が減退し、体が衰弱して死亡するという恐ろしい病気である。

解除の許可のあつたことを伝えたが山下は疎開解除はできないと拒んだ。

何故に、旅団長の命令をも山下は拒否することができたのか。ここに大本営直属の特務員の隠された秘密があつたのである。即ち、天皇直々に与えられた権限を有すると思いつた青年特務山下は、疎開の一切の命令指示は彼の権限と責任で行ない、旅団長の命令で疎開させたかのように見せかけながら、旅団長をも無視し、彼の勝手気ままな考え方で波照間の住民の生命と財産を取り扱つたものと思われる。ここに日本軍の護郷隊なるもの、特務兵、特務教員なるものの秘められたナゾがあり、山下を動かした日本軍の正体があつたのである。

宮崎旅団長の帰島許可が山下に拒否されると山下と識名校長の論争が始つた。帰島を拒否する山下にたまりかねた部落民は、一九四五年（昭和二十年）八月二日、南風見の挺身隊館に於いて緊急部落会を開催した。山下は「島に帰るなら玉砕することを覺悟しろ！」とどなりつけた。島に帰つて玉砕するか、そのまま疎開を続けるかの大詮定の結果、疎開地に踏みとどまる希望者は一人もなく、満場一致で帰島することに決議した。玉砕する決意での満場一致の決議の前には山下の軍刀も功を奏すことができなかつた。

眞に住民の立場にたち、住民の生命を守るために立ちあがつたのは軍人ではなく、学校の校長であつたのである。

その大協議に出席した仲底善祥は、

「山下は『島に帰るなら玉砕することを覺悟しろ！まだ終戦になつていないし、もう一度戻つて来るかも知れないから帰島するなら

家はくすらないでそのままにしておけ！」と言つたが私は『マラリアでこんなに苦しんでいるのだから、島に帰つたら玉砕はしてももう一度とこの地に来る能力はない！』とはつきり言つてやつた。

山下は引き上げにあたつて家はそのままにしておけとみんなに言ったまわったが、最後に残つた人たちは家をみんなして引き上げた」と話した。

この協議が終ると翌日から帰島準備にとりかかった。

一九四五五年（昭和二十年）八月七日、折からの大潮を利用して古見の前良川、後良川の奥深く避難してあつた漁船、昭洋丸、大福丸、進幸丸が暗夜に出動し、古見班より帰島を開始し、南風見、由布班の順に行なわれた。また病人、老人、子どもを先に帰島させ、健健全な青壯年は最後まで残つて始末した。

そのうちに終戦になつた。その知らせを聞いた住民は悲しむより安堵の気持を隠しきれなかつた。それからは昼間も運航することができるようになつた。

半年ぶりに島に帰つてみると道路も区別のつかないほど草が伸び、田畑にも農作物はなく荒れ果て、どの家も荒れ放題で、庭には背丈ほどの草が伸び深閑としたものであつた。疎開中台風がなかつたことが幸いで、家屋は破壊されず、また空襲で民家（保久盛家）の前に爆弾が落ち、直撃を受けなかつたので全壊せず、他は機銃の弾の跡があるくらいであったことが幸いであつた。

荒れ果てた耕地は牛馬もいないし、また、マラリアで耕作できるはずもなかつた。疎開地から持ち帰つたわずかな食糧が生命の糧となつたのである。疎開地から持ち帰つた食糧は各戸に分配した班もち半数以上が死んでしまつたのです。

とう熱発してしまいました。一日に家族の二人が死んだときなどは、熱発のない合間に枕をつき、草の茂った道をつまづきながら、元気な方をお願いして葬式させたものです。

間もなく二人の兄たちも防衛召集から帰りましたが、三男の嫁は夫を待つていていたかのよう、兄が帰つて三日目に死んでしまいました。兄たちは大勢の家族の看病をいつしょうけんめいにやつていて、ただき、班から分けてきたみをついておかゆをたいて食べさせたり、魚を取つてきて食べさせたりしたのですが無理のせいか頼りにした兄たちも熱発してしまい、大泊家は誰一人看病できる者もなく、全員勤げぬ身となりました。その頃までには十七名の家族のうち半数以上が死んでしまつたのです。

私の実家（保久盛）の兄が防衛召集から帰つてきて私を見舞いにパパヤのスープをひんに入れて持つて来てもらい、そして『家に帰つて来なさい。自分が看病するから』と言つて帰りました。

大泊家には看病する人がいないし、自分の病気もしだいに重くなつてくると、親兄弟の顔が見たくてなりませんでした。

兄たちの許しを得て私は実家に行くことを決意し、私の長男（五歳）には明日迎えをよこすと約束して、私は発熱の間をはからつて何度も休みながら、やつとのことで実家にたどりつきました。

『お母さん』と言つて入つた私は話すことばもなく、泣きくずれました。母は元氣で私を迎えてもらいましたが、父は發熱して寝ており、私を見ると『何故に帰つてきたか。女は嫁いだらこの家の人がない。何を食べるためになつたのか。この家にはお前に食べさせるものはない。明日すぐ帰りなさい』と親ながら私をひどくしかりま

あつたが、多くの班はある期間共同炊事を行ない共同作業によつて復興にあたつたが、一家全員マラリアに倒れ、死亡者が続出するなかでは共同炊事、共同作業もなりたたず、各戸、各自、自分のことすらできない事態に追い込まれた。

特に北、名石、南部落はマラリアがひどく、一家全員マラリアに倒れ、一家全滅し、家系断絶する家が続出した。

北部落の大泊家では十七名家族から四男の嫁ミツ一人生き残るという悲惨なことがあつた。大泊ミツは当時のようすを涙を浮べながら次のように話した。

「私の家は長男、三男、四男（主人）の夫婦と子どもたちが揃つて一家で生活していたので十七名家族でした。主人は戰地で病氣になりました翌日マラリアで高熱を出して亡くなりました。そのときまでは私も三男の姉嫁も元気でしたので他人を頼んで棺を作つてもらい、四〇五人で葬式しましたが、当時としては最高の葬式でした。

その後は大家族のうえに食糧も少なく、栄養失調と看病不足で次々枕を並べて倒れて死んでゆくのでした。私の次男（四歳）の葬式はむしろに包んで元気な方を頼んで二人で焼鉢の石垣の側に運び、土を掘つて埋め、焼鉢の石でかぶしておきました。まるで、動物を埋めるようなものでした。それでも後の葬式に比べれば、土を掘つて埋めたので良い方でした。私は父のいない子だけに、子どもへの望みをかけていましたが、一人を亡してからは疲労も重なり、とう

した。私は悲しくて、悲しくて泣きくすれました。

裏座には兄と嫁が発熱して寝ていてました。兄は魚を取つて食べさせるために、無理して熱発してしまつたのです。兄は高熱で脳症をおこして発狂していたのです。姉は頭いっぽいシラミがいたので髪を切つたと言つて、男のようになら坊主をしていました。兄も姉も重体でしたので、私までこの家で面倒をみせてもらえないと思い、帰ろうと考えているうちに目が暮れて帰れなくなり、その晩は実家で泊りました。その翌日からひどい発作と高熱を出し、兄の死もわかる状態でした。幸い実家には母も妹や甥、姪たちも元気でしたので、看病してもらいました。二～三日して嫁家においてあつた長男は親せきの人に連れられて来ましたが、実家の親はきびしく『この子は大泊家の子だ。こっちで看病してくれる者もいないし、直ぐ返せ！』と言つて追い返されました。『かあちゃん、かあちゃん』と泣き叫ぶわが子の声をふとんの中で聞きながら別れました。

その三日後、『長男が死んだのでどの服を着せるか』との言葉が聞えるのであまりにもおどろき、私は氣を失なつてしましました。今でもその後のことはどうなつたか思い出せません。私は意識を失なつて、死んだ子どもの名を呼んだり、家族の名を呼んだりしたそです。

そのうちに意識も回復し、ようやく歩けるようになつて、大泊家に帰りました。大泊家ではみんななくなつてしまい、仮塙の前で、私人生き残つてほんとに申し訳ないと黙つて心ゆくまで泣いたのです。

私は人のいない家に一人居ることもできず、また実家に戻りまし

た。

十二月頃になつてようやく元氣になつたので、私は自分の手で亡くなつた十六名の死亡届を書きました。死亡届を書きながらひとりひとりの面影が思い出されて泣けてきました。家族はみんなやさしく、いい方ばかりでしたのに何の罪があつてこんな破目におちいつてしまつたかと思うと戦争がにくらしく思われます。今でもお盆になると、仏壇に供物をしながら当時のことが思い出されて泣けてくるのです。このような悲惨なことがこの世にあったのかと思わることが現にあつたのである。

大泊家のマラリアで亡くなつた方々は次のとおりである。

六月	南風見	長男嫁	ヒサマ	三七歳
七月	ク	長男の五男	精佑	五ク
八月	波照間	波照間で母	ナヒ	八六ク
"	"	四男の次男	一雄	四ク
"	"	三男の嫁	秋江	三二ク
"	"	長男の長女	初子	三ク
"	"	四男	善起	八ク
"	"	三男	幸吉	一二ク
"	"	四男の長男	高輝	五ク
九月	ク	長男	加那	三九ク
"	"	長男の長男	精昌	一六ク
一〇月	ク	次男	喜益	三七ク
"	"	三男	敏明	三三ク

土など埋つて埋めることなどできないので、焼鉢の石垣の側に置き、石垣をくずして周囲に積み上げ、その上にススキや木の枝をかぶせておくことしかできなかつた。墓標など立てるとはできなかつた。焼鉢の周辺にはそのような墓がたくさんあつて、マラリアのしおうけつがおさまって、それを洗骨するときは他人のものとまちがえたりしてその処理にはたいへん骨がおれた。

北部落の浦仲家では十一名の家族のなかから子どもたち二人が生き残つただけだつた。その一人浦仲タカは次のようによ話す。

「私は家族の多くが死んでしまつてからマラリアにかかりました。父は私がだいぶよくなつて再発しました。……そのうちにヒデ子姉（十七歳）が死んでしまい、父も高熱で動けないし、どこをまわつても葬式でくる人が頼めないので三日間もそのままほつておいた。そのうちに父の熱がさめたので死後三日後に父と二人で異臭のする遺体をひきすりだし、家の前の防空壕に入れおきました。それから異臭がしだいにはげしくなつてくるし、部落内だからそこにおけないといふことでそれから四～五日後に西の新城家のおじさんと他の人を頼んで来て葬式してもらいました。そのたちは、異臭があまりひどいでお酒を飲んでから葬式にかかりました。その時は私も少し元気でしたので、ごはんだけたいておにぎりにして墓に持たせました。当時はおにぎりやパバヤを供えて葬式したのはよい方で、ほとんどせんこうだけ供えて葬式をやつたのです。

私の父も葬式してもらえる人がなかなか頼めずやつとのことで上里徳善さんを頼んできて死んで二日後に葬式してもらいました。弟の敏雄（七歳）はマラリアの熱のうえに唇のそばに黒い斑点ができ

てそれが齧れ出し、どんどん広がつて歯が見えるほどになつてたいへん気の毒な死に方をしました。

マラリアでそんなにたくさん的人が死んだのはキニネ下足と看病不足と栄養不足だと思います。家族全員がかかつて枕を並べて倒れているので、看病などできませんでした。熱がさめた間にしか食事の準備も看病もできなかつたのです。飲み水をくんでくることできたいへんなものでした。当時は今のようにタンクや水道などといふものはないので深い井戸から水をくむことはたいへんなことです。飲み水さえ手に入れるのがたいへんでしたので、高熱を出したときに頭を冷やす水などは洗面器一杯の水をたいせつに使つたのです。

マラリアの最中までは疎開地から持ち帰った米や粟があつたので助かりましたが、もみをつき、食べられるようにこしらえることでさえたいへんでした。マラリアの最中にその食糧がなくなつて、ソテツに頼っていたらどんなことになつたか知れません。ソテツに頼るようになつた頃はマラリアもだいぶよくなつていました。軍が来ておかゆをたいて配給して食べさせたり、アテプリン（マラリアの薬）を配給したりしたときはマラリアはだいぶよくなつてからのことでした。

死亡届もずっと後になつてマラリアもおさまつてから書きましたが、葬式のときは位牌を書く余裕もなかつたので死亡年月日も想像で書きました。また死亡届もかんたんなもので一片の紙きれに氏名と死亡年月日を書いて送るだけでした」。

浦仲家のマラリア死者者は次のとおりである。

一一月 ク 長男の次男 幸佑 一四ク
一一月 波照間で三女 トミ 二一ク
ク ク 五男 精幸 一七ク

大泊家の婿である西里正次は当時のように話した。

「大泊家の三男の敏明が自分の妻（秋江）が死んだが自分では葬式できそうにないのでしてくれと杖をついて私の家にやって来た。私の家もみんなマラリアで倒れているし、私も寝ていたが、それだけしたのに体が動けそうにないのでできないとことわつた。

朝は水がないというので他にくみに行ける者がいないからしかたなく一升びん二本を持って阿保勢の井戸で水をくんで来たらたつたそれが『せめて屋敷の外にでも運んで葬れたらよいがあなたたち兄弟のなかでさえもできないというものなら自分もどうしたらいいかわからない。……』と言つて泣きながら杖をついて出て行つた。彼はどのようにして自分の妻を葬式したか私もわからぬ。五男の精幸はこれ一人でも生命が助からないと大泊家は断絶してたいへんなことになると思って、私の家に連れて来て、二か月ぐらい育て看病した。ところが衰弱して歩ききれないで、便は家の中でやってよいということで裏座の入口からさせた。そのため雨戸も腐つてしまつた。そのように大切に育てたが彼も死んでしまつた。トミ、精幸、敏明などは私が葬式した。

当時の葬式は棺など作つておれないでの生竹を二本切つてきて、こもをあんでつなぎ、タンカをつくり、それに死体をむしろでくるんで乗せ、肩にかけるよう網をつけ、両手でそれをしつかりつかんで二人でかついで葬式した。

九月	祖母	ナヒ	六二歳
〃	母	イツキ	三九ク
〃	妹	美代	一ーク
〃	(三女)	スエ子	四ク
〃	(五女)	和雄	ニク
〃	(次男)	ヒデ子	一七ク
一〇月	姉	（長女）	真那
〃	父	（長男）	四七ク
一一月	弟	敏雄	七ク
一一月	叔母	ヨシ	一八ク
また	南部落の勝連ス工は、		
「浦仲のタカ子はたいへん氣の毒でした。タカ子のお父さんが亡くなつたとき、父の遺言で父が死んだらこれで他人を頼んできて葬式してくれと残したお金だと言つて、それを持って仲筋家に来ていたが、そのとき佐事のじいさんもそこにおられたが、佐事さんは当日三人の葬式をすることになつてるので時間がなくてできない。勝連のおじさんのところに行きなさいと言つたら泣きながら出て行つた。そのようすは氣の毒でならなかつた。その後はどうなつたかわからない。			
私の主人（文雄）は復員してきて当時は元気でしたので葬式をする人だつた。死んで四日過ぎた田盛の子どもを葬式して来て、その異臭が体に染つて自分も氣分が悪くなつて病気になりそうだといふので頼りにしている人が倒れたらたいへんなことになるということでお香水をつけてやつたり、ヨモギに酢を入れてつぶしたもので体をふいたりやつたこともあつた」と話した。			

「浦仲のタカ子はたいへん氣の毒でした。タカ子のお父さんが亡くなつたとき、父の遺言で父が死んだらこれで他人を頼んてきて葬式してくれと残したお金だと言つて、それを持って仲筋家に来ていたが、そのとき佐事のじいさんもそこにおられたが、佐事さんは当日三人の葬式をすることになつてるので時間がなくてできない。勝連のおじさんのところに行きなさいと言つたら泣きながら出て行つた。そのようすは氣の毒でならなかつた。その後はどうなつたかわからない。

私の主人（文雄）は復員してきて当時は元気でしたので葬式をする人だつた。死んで四日過ぎた田盛の子どもを葬式して来て、その異臭が体に染つて自分も氣分が悪くなつて病気になりそうだといふので頼りにしている人が倒れたらたいへんなことになるということでお香水をつけてやつたり、ヨモギに酢を入れてつぶしたもので体をふいたりやつたこともあつた」と話した。

当時は死んで数日後にやつと葬式するということがたびたびあつた。なかでも北部落の後の部落はそれの新里家では仁王じいさんは、村はそれでもあつたのでアグナブヤとも呼んだは子どもを「地で失ない、残つた家族をマラリアで失ない、最後に一人になつたじいさんは、村はそれでもあつたので、部落民も気づかず、死んで二週間以上経過して衛生班に発見され骨とひとつになつて腐乱した死体を骨とともに運び出し庭の防空壕に葬るという痛ましいこともあるた。

北部落の鳩間家は一家全滅し、家系断絶という事態になつた。現在東田家の次男宏介がその家を繼いでいる。鳩間家のマラリアで死んだ人は次のとおりである。

七月	長男	保久利	三四歳
九月	長男の次男	保	五ク
九月	長女の長男	徳善	三ク
〃	長女	トシ	三〇ク
一〇月	長男の長男	寛治	九ク
一二月	次男	兵作	三二ク
第一回空襲で食糧倉庫を全焼した北部落の田盛家は部落全戸から食糧を徴集して与えたが、苦しいなかで、食糧不足のため八名家族のうち子どもたち二人だけ生き残つた。マラリアで亡くなつたのは次の六名である。			
八月	母	カナシ	六〇歳
八月	三男	方三	二七ク
〃	長男の嫁	ウトシ	三五ク

なもので、弱々しく小さな声で呼ぶ声がすると私は何のことだとわかっていたので、「きょうは誰の家か」と聞くと名だけしか聞きとれない声がする。「心配するな、私がまわつてくるから君ははやく帰つて寝なさい」と言って帰えす。このような人が毎日やってきてまるで私は葬式屋のようなものだつた。

私は毎日のように辻野先生や田福さんにお願ひしたりして、部落中で歩ける人を呼び出したが集まる人はいつも七八名だし、死んだ人をかつげるものは四五六人しかなかつた。

それでかつげない人は竹や木を切つてきて二本ずつ紐をかけてタンカをつくり、また元気なものは、二と三人ずつ組んで葬式をするというように手配してやつた。一日に三七四名まではどうにか葬式できたが、一日に七名も死んだときは夜までかかるてやつた。底原徹の死んだ口は七名の葬式をやつたが、夜までかかるてやり、その日のことは今もつて忘れない。何で人間の世にこのようなことがあるのかと思うほど悲惨なものだつた。

私の妹の死んだ口は、彼女は未明死んだが、当日は各戸に食糧がなくなつてゐるというので、疎開から持ち帰つて班でまとめてあつた食糧を分配しなければならない目だつたので、死んだ人はどうでもよい、生き残つた人の対策からしなければならないと思って、弟のことは誰にも話さず、食糧から先に配つてやつた。それが終つて『実はまよ、妹が死んでしまつた。私は今から彼女の葬式をしなければならないが、私一人では晩までに間に合わない。働けるものは手伝つてくれ』と言つて集まつてもらつたが、働ける者は五人名しかいなかつた。それから手配してやつと明るいうちに葬式するやひげと頭髪の伸び放題のもの、頭髪の全くないものなどさまざまあつた。

南部落では最もひどかつたのは慶田本家（九名）と底原家などで

「私はマラリアにからなかつたので葬式する人だつた。私は部落の役員をしていたので毎晩十二時までは部落をまわつてきて寝るのがふつうだつた。朝になると毎朝のように、げたをカラカラと引きずりながら、ゆっくり歩いてくる音が聞えて來た。決つて葬式を頼む人だつた。そのようすといつたら眞青な顔に目のひつこんだものやひげと頭髪の伸び放題のもの、頭髪の全くないものなどさまざま

ことができた。

私の兄の末子（当時六歳の女の子）を葬式したときは他に手伝つてもらえる人がいないので私一人で、後の方にはモッコに入れたその子を、前には葬式の供物（線香とにぎりごはん）を入れたもののかついて葬式したこともある。そんなときは土を掘つて埋めることがでないので、焼鉢の近くの石垣の側におき、周囲に石を積み上げてその上にススキを切つてかぶせるだけでせいいっぽいだつた

名石部落でもマラリアがひどく、嘉良家、加屋本家、金盛家は一家全滅した。また上盛家では一週間のうちに五名が亡くなつた。富底正一はそのときのようすを次のように話した。

「私の家族ではマラリアで最初に死んだのは、おじの真那佐（六一歳）で、続いてナビ（五七歳）であった。私の長男の榮三（八歳）と三男の正二（二歳）は同じ日に死んだが、いつ死んだかわからなかつた。家族はみんなマラリアで倒れて発熱しているので、自分のことすらできない状態であつたから子どもの死ぬのも知らなかつた。室内がさわってみると冷たくなつているので、それからさわぎたて、二人とも死んでいた。家族はみんな発熱していたので、波照間ナビ、富底イケヤ、仲底正夫の三人で二人の子を墓の周囲の石垣に葬式してもらった。妹のエイ子（一二歳）はマラリアにかかつて回復しつつあつたが、病後食欲はあるのに食べ物がないので、自分でかつお節をかすめ取つて食べ過ぎ、胃腸をこわして下痢して死んでしまつた。十名家族のうち五名がマラリアで死んだ」

前部落の前加良家でも一日に松（五一歳）とウトシ（七三歳）の

二人が亡くなつた。一家の主人をモッコに入れ、足をたらしたまま葬式するようなことはできないということで、家の戸をはずし、その板で棺をつくつて葬式したとのことである。

前部落と富嘉部落は元気な人も割いたのでそれほどひどい葬式のしかたはなかつた。

このようにこの島のマラリアの悲劇はことばで表現できないような慘憺たる状態になり、疎開前の家畜の生地獄は疎開後は人間の生地獄となつたのである。

7. 食糧難とソテツ

マラリアの最中までは疎開地から持ち帰つた食糧でどうにか飢えをしのいでいたが、年の暮頃からその食糧も食べつくし、そのまま、マラリアで耕作もできないし、耕地も荒れ果てていているので人力ではどうしようもないし、家畜もいないというようによ緊迫した事態に直面した。

幸いにして野生のソテツが生い茂り、ふだんはかえりみられないこの野生のソテツを命の綱にしたのである。当時、波照間で倒されたソテツは一戸平均七〇〇本、全島で約十五万本のソテツが倒されたと言われている。

ソテツは生で食べると中毒するが、醜酔させると毒素がとれ、食用として供することができる。ソテツの実はふだんでも食用にされることがあるがそれは限度があるのでその幹を切り倒し、こぶし大に切つて木の陰に地上に積み上げ、かやをかぶして醜酔させ、それをうすに水につけて水につけ、何回も水をかえて沈殿させたでんぶんを

おかゆにしたり、また幹をかんなでけずつて日に干し、乾燥して粉末にしていもと混せて食べるというように手のかかるものであつた。また多量の水を必要とするのでマラリアのなかではそれをこしらえて食べるということはたいへんのことであつた。村の近くの井戸の周囲にはソテツを沈殿させる桶がすらり並んだ。

ソテツは醜酔のしかたがよければそのおかゆは固まるが、それがまづいと固まらず、どろどろの汁を主食とするので腹持ちのあるものではなかつた。いもをまざると固まるが、いもは畑に自生しているいも（ムイアッコン）しかなく手に入れるのは困難だつた。

野菜は野生のアキノノゲシやニラ、ペペヤなどで、ペペヤは幹まで食べつくした。野菜が手に入れば幸いで、ふつうはソテツのおかゆだけを食べた。このような食事では栄養補給などできるはずはなかつた。

また、マラリアで全員倒れているので漁船も迎航することができず、島のこのような事態は中央に知らされることもなく、救援の対策も全くなかつた。

このようなマラリアと窮乏のなかで、十二月末頃、島の指導者仲本信幸村議はマラリアで倒れて意識の混迷するなかで三日がかりで一通の手紙を書き、島の窮状を訴え、救援を要請した。その手紙は決死の覚悟で書いた筆跡がこくめいにきざみこまれ、血のにじみでるようなものがあり、当事者の心を打つた。

それを受けた村役所と旅团司令部からわざかばかりの医薬品と食糧が送られ、軍医二名と数名の救援隊が派遣された。彼等はおかげをたいて病人を見舞つたりしたが、全島生き地獄と化した事態では

何の足しにもならず、またその時には多くの患者は死に、生き残つた者は回復に向つていた。無謀な退島命令を強行し、島の住民を酸鼻の極に追い込んだ旅團だったが、その償いを果たす能力は持ちあわせていなかつたのである。旅團から數頭の牛とわざかばかりの農器具の援助があつたが山下は彼に近い身内に分配して彼は島を引き揚げて行つた。

その後救援物資の運搬に軍用船で同行した大浜信賢医博は当時のことを次のように記録している。

「今次の戦争において最も酸鼻を極めたところは波照間島でありました。住民のマラリア罹患率は九九・七%で、いわばすべての住民がマラリアにかかり、死亡者もまた最高で三〇・〇五%で、すなわち住民三名中一人は死亡しているのであります。

したがつて私等が波照間に着いた時は、救援物資を部落まで運ぶ方法がなく、回復期にある青年患者で、熱の間歇期にある者を動員して辛うじて出来たのであります。

私等は部落に入つて全く音楽が出来ません。

部落の様相は全く痛ましい限りであります。どの家を訪れても仮壇には白い位牌が三つ四つ並んでいて、残つた家族もまたすべて枕を並べて熱で伸吟しております。勿論看病する人もあります。薬はありません。食べる物もありません。着る物もありません。全部無い無いづくしです。庭を見ると古いむしろの上に紙屑のような物が干してあります。これは何かと尋ねて見ると、これは熱が下つた合間に野原の蘇鉄を切り倒して来て、これを千切りにして太陽に干して、後で食糧にするものだとの話。全くの蘇鉄地獄であります

す。私は部落民のマラリア治療薬と食糧を部落幹部に与え、住民が一日も早く回復する事を祈って、西表白浜に向って出発したものでした」（大浜信賢著『八重山のマラリア撲滅』二四六頁より）

日本軍の武装解除後、沖縄の行政機能は一切麻痺して無政府状態におちいったなかで、八重山郡民の手による「人民政府」ができ、官良長詳医師を支庁長とする「人民政府」の出現によって、この島に本格的な復興対策が行なわれた。

その四月には、戦争直前に波照間校校長の経験のある石垣在桃原用永（四一歳）が新政府の文化部社会課長に就任され、その救援の任務にたずさわったことが何よりの幸いであった。

その桃原氏はその体験を次のように記録している。

「官良支庁長は救援の要請を受けてさっそく私に『波照間救援の趣意書』を書いて郡民に訴えろと命じられた。私はかつて波照間に四か年も勤務していたし、戦争後の事情もそれとなく聞いていたので、案外、趣意書はたやすく書きあげて支庁長に提出した。支庁長は私の書いた趣意書を私宅で静かに読んで深く感動し、強く胸を打たれて感激のあまり、その夜はまんじりともせず、夜の明けるのももどかしく、夜明けとともに、事業部長の崎山英保氏を私宅に呼び、すぐ波照間へ行って一刻も早く島民を救済するように命じた。私の書いた趣意書は当時の『海南時報』に掲載し、郡民にアッピールした。

その四、五日後には官良支庁長を先頭に、衛生部長吉野高善氏、事業部長崎山英保氏に私が随行して、食糧品、衣料品、医薬品などをたんまり取り揃えて渡島し、さっそく、食糧品、医薬品を配給する

ほか、吉野部長による健康診断を行ない、官良支庁長と私は各戸をめぐり慰問した。その晩は島民を学校に集め、島民の志氣を鼓舞する大講演会を行なった。

廃家になった家は十数軒あったと思うが、それらの家は屋敷内外とも雑草が生い茂り、草丈は三、四十㌢も伸びて、仮壇に位牌だけが取り残されていた。主なき家、廃家のあわれな、もの憂い姿を初めて経験した。

島民は救援物資の配給を受けて、はじめて蘇生した心地がすると喜び勇んだ。支庁長は島民に感謝されつつ、翌日は帰任した。その後も波照間に対しては特別に物資の配給を多くした」（桃原用永著『八重山の民主化のために』六五頁）

その新政府の一行政の来島によって本格的な調査と復興対策がなされ、仲本信幸村議の進言によって「復興委員会」が設置され、その任務にあたつたのである。その委員長であった仲本信幸は次のように話した。

「四月には八重山支庁長の官良長詳氏をはじめ、政府関係の調査員がやって来て本格的な復興対策がなされた。その郡民政府社会課長の桃原用永氏が波照間の復興対策をどのようにしたらよいかと私の意見を聞くので、私は彼等の来る前から私案を持ってそれに従つて復興対策をすすめてきていたので、それを示した。それは「復興委員会」を設置して、その中に食糧班と衛生班をおく、衛生班の中に予防係と治療係を設置して復興対策にあたるというものであった。委員長は提案者である君がやれということで、私がやり、各委員は各部落の班長がそれにあたつた。食糧班は各戸が農耕ができる、自立

できるようになって三年後に解散した。

その解除式のときは波照間がこの苦悶から救われたのはソテツのたまものであり、それに恩義があるということと、波照間にソテツが初めて伝えたと言われる大泊の浜の東の岩陰で『ソテツの感謝祭』をした。

衛生班は継続してマラリアの撲滅にあたり、五年後にその委員会を解除した」

この太平洋戦争で強烈一人も死ななかつた波照間では飢えとマラリアで四七七名（八重山民政府衛生部の調査）で、当時の区長の調査では未届の新生児を含めると実際はそれ以上おり、マラリア以外の死者を含めると一九四六年当時約七〇〇名を越えた（公舎の総務の新川真那さんの証言）とのことである。

この数字は住民の三人に一人の割合で死亡したことになり、沖縄戦最大の死亡率となつたのである。

二、キナ樹の皮汁を飲んで命拾い

竹富村字西表 星

熱（四一歳）

那根

武（三八歳）

那良伊

ウムチ（三九歳）

西表貞子

（十九歳）

初めて軍隊がきて内離外離に砲台を築いたのは昭和十六年か十七年でした。

供出といって、軍ヘツハブキの茎、豆かす、野菜を婦人の方々に出来させていました。

また、婦人の方は、玄米を白米にするため前泊の浜にウスをならべて、白米にし、軍へ奉仕していました。

とにかく、食べ物は微発されるし、働ける者は微用でかりだされ、住民の生活を考えてくれませんでした。